龍記国物語―鏡の巫女―

月都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
龍記国物語―鏡の巫女―

【Ｎコード】
Ｎ５３３９Ｆ

【作者名】
月都

【あらすじ】
日々バイトに勤しむ高校二年生の基棟悠は最近女の子の声が聞えることで悩んでいた。ある日、悠は力強い声を聞き異世界へと導かれた。訪れた龍記国と言う国で悠は地球に帰るために動き出す。

序章　巫女の誕生

その日は酷い嵐だった。雷鳴は轟き、降りしきる雨はまるで矢のように大地に突き刺さる。

国の重要な巫女の誕生を前にして、周囲は慌ただしく動き回っている。五色の一人である自分も本来なら、鏡の間に赴くべきだった。だが、どうしても拭えぬ嫌な予想のせいで動けずにいた。

一度だけ会った巫女の母上は若く健康そのものだった。それでも、出産には危険が伴うものだ。亡くなる可能性は十分ある。

いや。不安なのはそこではなく、巫女のことだ。別に男子であっても何の問題はない。過去に男子が生まれ巫女になったことがある。

基本的に巫女に必要な素質は霊力の高さであって、男子も女子も関係はない。自分が危惧しているのは別のことだ。

「紫の。生まれたぞ」

自室に入ってきた同僚はもの凄く慌てていた。

「どうした。赤の」

「そ、それが」

同僚は口ごもる。そんなに大変なことが起きたのか。

「こ、子供は、双子だったんだ」

この龍記国は双子を忌むべきとする伝統がある。農民や商家などではあまり気にされてはいないが、皇族や巫女では気にしないわけにはいかなかった。

きっと霊力の高さが測られた後、どちらか一方は殺されるだろう。

そして、その宣言をするのは五色の長である自分だ。

罪もない生まれたばかりの赤子のどちらかを殺すなど、自分には

できない。だが、誰かがやらなくてはならないのだ。
嫌な予想が当たってしまった。当たらなければよかったものを。
だが、もう遅い。もう子供は生まれてしまったのだから。

一章　声

1

夏も本番になってきた七月の始めの朝早く、基棟悠は今日も新聞配達をしていた。朝は新聞配達、夕方はコンビニでバイトをしている悠は高校二年の乙女である。そうは言っても大分乙女の部分を失っている気がしないではないが。

悠は日本人特有の黒髪に黒い瞳を持つ、どこにでもいるような少女だ。明るく活発でしっかり者で通っているが、結構苦労しているのだ。悠は老夫婦の玄関先の前に置かれていたのだ。この其棟と言う苗字は引き取ってくれた老夫婦のものだ。五年間の間、悠はこの老夫婦と一緒に暮らしていた。

二人から離れて暮らすようになったのは、悠が六歳の頃、お爺さんが亡くなったのがきっかけだ。お婆さんは息子と一緒に暮らし、悠は隣の家に引き取られた。お婆さんの息子が悠を引き取るのを嫌がったからだ。

離れて暮らす時は寂しさばかりが募ったけど、時々お婆さんに会いに行けるから今はそれほど寂しくはなかった。今は李灯葉と言う作家の人と一緒に暮らしている。

李灯葉と書いて『りとうは』と言うが、大抵の人は読めない。この名前を聞いて中国の人かと思う人も多いが、本名は高橋太郎と言う有り触れた名前である。

灯葉の家は今時珍しい和の趣がる建物で、庭には大きな池がある。悠は自転者を玄関先に置いて、家に入った。

「灯葉さん。おはようございます」

居間に入ると、朝ごはんが用意されていた。

灯葉は白髪掛かった黒髪に、笑い皺が顔に刻まれている優しい老

人である。
「おはようございます。悠さん。いつもご苦労様です」
灯葉の丁寧な言葉は誰に対しても使われる。
「いえ。灯葉さんを当てにしてばかりじゃいけませんから」
悠は軽く首を振った。
「いいんですよ。私が好きでしていることですから。さ。朝ごはんにしましょうお腹空いたでしょう」
灯葉はにっこりと微笑んだ。
悠は朝ごはんを食べながら気になっていたことを灯葉に尋ねる。
「最近、変な声が聞えるんです」
「変な声ですか？」
「はい。女の子の声で私を呼ぶんです。お姉さまって。私に妹はいないはずなのに変でしょ」

三頁

「はい。女の子の声で私を呼ぶんです。お姉さまって。私に妹はいないはずなのに変でしょ」
妹どころが、親がいないのだ。その声がお姉さまなどと呼ぶのは変だ。いや。そもそも女の子の声が聞こえることが可笑しな話である。
「そうですか。困りましたね」
おっとりとしている口調の灯葉は言葉と同じく困った笑顔を浮かべている。
全てもことに親身になって聞いてくれるのは嬉しいことだが、そんな声聞えるわけがないと言われた方が悠の気持ち的にいい。否定してくれたら、ただの疲れからくる気のせいだと思えるのに。
「すみません。悠さん。これではいけませんね」
と、灯葉は頭を下げた。
「いえ。そんな」
悠は慌てて手を振る。謝ってもらうところでもないし、何より生活支援者を困らせるようなことをしたくなかった。
「悠さんの疑問に答えてあげることは出来ませんが、一つだけ。どんな選択をしたとしても、私はここで悠さんの帰りを待っています」
と、いつものように微笑みを浮かべた。
だが、悠は灯葉の言葉に含みを感じて時計を見た。時計は七時半のところに針が来ていた。
「んー！」
悠は慌てて立ち上がった。
授業が始まるのは九時だが、八時四十分頃に朝のミーティングが始まるのだ。先生が遅い日は五十分頃始まるが、早い時は早い。目指せ無遅刻無欠席なので、急いで支度したければ。バスの時間もあるし。

「ごちそうさまでした」
悠は急いで食器をまとめて、台所の流しに食器をおいた。いつなら食器を洗う余裕があるのだが、今日はなさそうだ。
「食器お願いします」
灯葉の返事を待たずにそのまま部屋に駆け込んだ。どうも今日はゆっくりしずきてしまったらしい。
怒濤の勢いで着替えをすまし、玄関に行くと灯葉が待っていた。
「悠さん。帰って来たら、お話があります」
なにやら悲しげに灯葉が言うので、何か問題でも起こったのか不安になる。
悠が不安そうにしているのがわかってか、灯葉は直ぐに微笑みを浮かべた。
「大丈夫ですよ。ただ、お話がしたいだけですから」
「そうですか」

四頁

納得できないが、悠は頷いた。時間もないので。
「行ってきます」
「いってらっしゃい」
灯葉の返事を聞いて、悠は家を後にした。
悠はバス停までたどり着くとため息をついた。走ってバス停まで来たから息切れしている。いくら体力があると行っても、バス停まで走るのは酷だ。それに走るのは苦手だ。
「はぁー」
深く息を吐いた。
待っている間は暇だが、遅刻しないですみそうだ。
それから、バスに乗り込み高校へと向かった。
高校に着いた悠は自分のクラスに行き、席に座った。席着くと落ち着くのか、机の上に顔を載せて息をつく。目標である無遅刻無欠席は今のところクリアだ。
こつこつと机を叩かれて顔を上げると友達の林檎がいた。髪を二つにわけて結んでいる天然の少女がにっこり笑っている。
林檎とはどこぞの歌手に似ているからついたあだ名ではない。正真正銘、本名だ。石橋林檎。それが、彼女の名前だ。
「おはよう。悠ちゃん」
「おはよう」
「今日は遅かったね」
林檎はのんびりとした口調で言った。
「遅刻してないんだからセーフよ」
悠はちょっと悔しげに言った。
林檎は天然ののんびり屋さんで、いつも遅刻ギリギリにしか高校に来ない。そのいつも遅刻ギリギリにしか来ない林檎が先にいるのはちょっと悔しいのだ。

「あのね。今日、あきちゃんと一緒に映画観に行くの。一緒に行こう」
きらきら笑顔で誘ってくれるが、今日も悠はバイトある。
「ごめん。今日もバイトがあるから」
悠がそう言うと林檎が不満げな表情をする。
「えぇ。昨日もバイトだったよ」
「うん。ごめん」
悠は毎日バイトをいれてある。学費やら生活費のほとんどを灯葉に出してもらっているのだ。私的なお金は自分で稼がないと。あまり甘えてばかりはいられないのだ。
「ねぇ。毎日バイトばかりで大丈夫なの？」
林檎は心配そうな顔をする。

五頁

確かに、バイトのしすぎのような気がするが、無理はしていない。とは思うのだが、幻聴が聞こえるのは無理をしているせいかもしれない。

「んー。でも、いきなり休めないから、また今度ね」

悠は苦笑しながら言った。

「うん。それもそうだね。一緒に行けないのは、残念だけど無理しないでね」

ちゃんと休まないと駄目だよと、念を押しして林檎は自分の席に戻って行った。

林檎が席に戻って二三分後、チャイムがなった。悠は一つ溜息をついた。

放課後、悠はバイト先であるコンビニを目指していた。コンビニは高校の近くにあるから、のんびりと歩いていた。

「お姉さま」

悠は、ふっと足を止めた。また、あの声だ。幻聴だと、言い聞かせるが、効果はあまりない。

「お姉さま」

その声が間近に聞こえた気がして、悠は首を振る。もしかしたら、相当疲れているのかもしれない。今日のバイトは休んだ方がいいのかもしれない。半ば本気で考えたした時、もう一度声が聞こえた。

「我を解放せよ」

あの声とは違う力強い声に悠は振り返った。

目の前に広がるのは畑だった。

「ん？」

悠は首を傾げた。確か高校の近くに畑はなかったはずだが。

悠は慌てて周囲を見渡しても畑しかない。

「なっ！」

絶対におかしい。自分が歩いていたのは、コンクリートで出来た道だ。こんな自然の土で出来た道じゃない。

それに、なんだか肌寒い。今は夏なのに、冬の始まりくらいの寒さだ。

「な……」

それ以上言葉が出てこない。いや。むしろ、出てくるはずもない。

六頁

（夢。これは夢よ）
やっと思いついたのは、自分が歩いたまま寝てしまって夢を見ているというものだ。いくらなんでも歩きながら寝るなんて器用なこと悠にできるはずがない。でも、こんな状況夢でもないと説明できないのだ。
試しに頬でも抓ってみるかと、手を挙げた。
（でも、これで痛かったらどうすんの）
そう。これで痛かったら夢ではなく、現実ということになる。
（で、できない）
悠は自分の手をじっと見つめた。
夢ならいいのだ。覚めるのを待てばいいだけなのだから。だが、現実ならそうはいかない。原因を突き止め、帰らなければ。
これが、夢なら直ぐに助けが来くるはずだが、現実はそうはゆくまい。
（いや。だから、夢。これは夢なのよ。私）
と、言い聞かせるがあまり巧くいっていない。　悠は、両手で頭を抱えた。夢にしては、身にしみる寒さがリアルすぎる。
（いやー。このままじゃ給料がー）
帰ることより、給料のことを先に気にするのはいかにも悠らしい。
（うぅ）
夢なら早く覚めてくれと、悠は切に願っていた。

2

うずくまっていた悠は顔を上げて溜息をついた。
（いつまでもじっとしてもしょうがない）
それに、ずっとじっとしているなど性に合わない。悠は立ち上が

って、辺りを見回した。
広大な畑が広がっているが、何も植えられていない。土が盛り上がっているから、かろうじて畑とわかるが、よく見れば雑草などが無雑作に生えていて荒れていた。もうこの土地は使われていないのかもしれない。
「んー」
土地勘もない悠にはどこに行ったら、人里があるのかわからない。適当に歩き出してもいいのだが、夜になる前には人がいる場所に出たかった。流石に野宿は嫌だ。
「ほう。これは珍しい」
と、後ろから声が掛かった。
悠が慌てて振り返ると、白髪の老人が立っていた。その老人は白い着物に白い羽織、白く長い鬚がまるで仙人のようだった。

七頁

「狐に化かされて来てみれば、清らかな乙女がおりおる」
その老人は笑った。
「あのここは何所でしょうか？」
色々突っ込みどころはあるが、それよりここが何所なのか知るのが先だ。
「ここかね。ここは龍記国朱雀省甲記村じゃ」
老人は鬚を触りながら言った。
（りゅうきこくすざくしょうこうきむらね）
と、悠は頭に叩き込んだ。
「じゃが、お前さんは知らんじゃろ。遠くから来たみたいじゃしな」
老人は興味深げに悠を見つめた。
「え？」
まだ何も言っていないのにどうして、この老人は悠がこの国の人間じゃないとわかったのだろう。
「そんな服装、この国の人間はせんのじゃよ」
悠は老人に言われて、制服を引っ張った。と言うことは、この国では着物が主流なのだ。
「あの。私、日本と言う国で暮らしているんですけど、さっき突然この場所に出てしまったんです」
悠が説明すると、老人は興味深げに頷いた。
「それは神隠しじゃ」
「神隠し？」
どこかで聞いたような気がするが、具体的な内容は思い出せなかった。
「綺麗な霊力をもっているようじゃから、神様に気にいれられて、この国に連れて来られてしまったんじゃ」
はた迷惑な神様もいたもんだと思いながら、悠は気になっている

ことを口にする。
「あの帰れるんでしょうか？」
「帰れるぞ。国帰るなら、連れてきた神様を探すか、項式寮の式術師に頼むかじゃな」
「えっ。ちょっと待ってください。こうしきりょうとかしきじゅつしってなんですか？」
「ふむ。そうじゃな。説明せんとな」
老人はそう言って、悠を手招きした。
悠は老人の前にしゃがみ込んだ。
同じくしゃがみ込んだ老人は、木の枝で何やら書き込んでいた。ひし形の形をした絵に、書き込んでいくのは線と文字だ。最後にひし形の上に龍記国と書いて、木の枝を休めた。
そこに書かれた地図を見て、悠はりゅうきこくの書き方を知った。

八頁

「この龍記国は四つの省と皇帝陛下直轄地、流星省に別れておる。でじゃ。ここが朱雀省甲記村」

老人はこつこつと甲記村を叩いた。

甲記村の北に行くと白虎省があり、東には流星省があった。西には何も書かれていないから他所の国なのだろう。

「項式寮とは式術師を統轄する機関のことじゃ。式術師は星を読み世の流れを知り、式神を操り、怨霊や妖怪から人を守るもの達のことじゃ」

老人は地面に漢字を書きながら、説明してくれた。

式術師とはまるで陰陽師のようだ。もしかしたら、名前が違うだけでしていることは同じなのかも知れない。

悠は真面目に聞いていたが、神だとか妖怪だとかそんなもの信じてはいなかった。昔あんなに神に祈ったのに、神は悠の願いは聞き入れてはくれなかったのだ。神なんて存在がもしいるなら、悠は独りぼっちではなかっただろう。

「どうしたのじゃ？」

老人に言われて、悠は首を振った。つい自分の考えに没頭してしまった。今はそんなことよりも、現実に向き合わなければ。

「あ。いえ。何でもないです。その式術師とは、どこに行けば会えますか？」

やはり、神なんてよくわからない存在を探し出すよりも、人間を探し出す方が断然簡単だ。悠が尋ねると、老人は少し悩むように首を傾げた。

「ふむ。ここからならどちらでも行けるが。まぁ、朱雀省の方がいいじゃろう」

「あの」

悠は戸惑ったように声をかけた。

「あぁ。すまんのう。朱雀省の桜鈴市に項式寮の朱雀省支部がある。そこを訪ねるといいじゃろ」
桜に鈴と書いておうりんと読む字を見つめて、悠は首を傾げた。
「どれくらいで着きますか？　あっ。それと項式寮の特徴を教えてください」
「ふむ。桜鈴市までは四日くらいかの。項式寮、朱雀省支部の建物は朱雀が描かれている門と赤い屋根が目印じゃ」
老人はそう言って溜息をついた。
「だが、おまえさん一人で行かせるのはのぅ。とりあえず、わしが紹介状を書いておくから項式寮の方は何の問題もないが……」
そう言って黙り込んだ老人を見て、悠は首を傾げた。そう言えば、この老人のことを悠は何もしらなかった。親切にこの国のことを教えてくれるのは　助かるが、この老人は何者なのだろう。項式寮に紹介状を書くと言うのだから、この老人は式術師なのかもしれない。

九頁

「あの」
「ん？　なんじゃね」
老人は顔を上げて悠を見た。
「あの。私は基棟悠って言います。色々教えてくれて助かるんですが、貴方は何者です？」
ようやく問われた疑問に老人はにやりと笑った。
「わしか。わしは元式術師の李俊敬じゃ」
りしゅんけいと言う名前は中国っぽいが、ここが中国ではないことは悠にもわかっている。もし、中国なら言葉は通じないはずだ。悠が今話している言葉は日本語で、中国なら通じるわけがない。それに、地名もまるっきり違う。朱雀省など聞いたことがない。
「ん？　式術師なんですか。えっと俊敬さん」
「そうじゃよ。驚いたかね？」
俊敬はにやにやと笑いながら言った。
「えっ。まあ……」
驚くより先に、ここが地球のどこかだとつい考えてしまう。そんなわけないのに。
「まあ、それはいいじゃろ。それよりもこれからのことじゃ」
俊敬はにやつくのを止めて、真剣な表情を浮かべた。
「え？」
「お前さん一人で桜鈴市に行かせるのはのう」
「何かあるんですか？」
悠はごくりと唾を飲んだ。
「まあ、そうじゃの。先ずは物取りじゃろ。妖怪に人攫い……」
俊敬は指を折りながら話していた。
「えっ。あの妖怪って？」
まだ、物取りに人攫いはわかるが、妖怪はちょっと判断に困る。

妖怪とは空想上の生き物で現実には存在していないはずだ。そんな存在が危険になるとは思えない。それとも、この世界では妖怪が存在しているのだろうか。
「妖怪は妖怪じゃよ。まあ、そんな大物は結界に守られておるから現れんが。小物でもなんの防護策を持たんお前には辛いだろ」
「そうでしょうか？」
大物小物の基準が悠にはわからないが、元式術師が言うのだから辛いのだろうと思う。でも、どうしても妖怪が道を歩いている姿が想像できない。
「それにじゃ。物取りやら、人攫いやら諸々のこともあるしのう」
俊敬は悩ましげに鬚を撫でた。
「じゃあ、俊敬さんが一緒に行ってくれればいいじゃないですか？」

十頁

元式術師なら、妖怪に対しては強いはずだ。それに妖怪も専門としているのだから、人間ぐらい余裕で倒せるだろう。
「わしか。わしはちょっと駄目じゃ。今はちと忙しい。まあ、その件は歩きながら考えるとするかのう。暗くなる前に、村に戻らんと」
俊敬はすっと立ち上がった。
「おお。そうじゃ。忘れておった」
俊敬は首から、鎖を外して悠に渡した。
悠はその鎖を見て首を傾げた。その鎖には白い色をした長方形の物が取り付けてあった。
「えーと。なんですか？」
「翻訳機じゃ。これさえあれば、言葉に困らん。これを肌身離さずに持っておくんじゃぞ」
「え。あ、はい」
と言うことは、俊敬と言葉が通じていたのはこの翻訳機のおかげだったらしい。やはり、日本語はこの国では通じないのだ。にしても、翻訳機が作れると言うことは、日本語を喋れる人がこの国にいるのだ。すると、日本とこの国は交流があるのだろうか。
いや。そんなわけはない。ここは地球ではないのだから、日本との交流があるわけがない。それに、翻訳機とは一方的な物だ。俊敬がこの翻訳機を使って日本語を理解したとしても、悠はこの国の言葉は理解できない。この翻訳機一個だけでは会話が成立するわけがない。
それに、この翻訳機どうやって使うのだ。言葉を打ち込むキーボードもないし、打ち込んだ言葉を写す画面もない。所謂、電子辞書的なものだと思っていたのだが、この翻訳機はただの白い長方形の形をした物だ。これのどこが翻訳機なのだろうか。
「あの、これどうやって使うんですか？」

悠が尋ねると、俊敬はにっと笑った。
「ただ持っているだけでいいんじゃよ。それだけで、こっちの言葉が理解できて、相手にもお前さんの言葉が理解できるようになる。これは神隠しにあった人達のために作られたものじゃよ。神隠しにあった者は、この国の人間じゃないからのう。言葉は通じんのじゃ」
よくわからないが、持っているだけで言葉が通じるのはとっても便利だ。
「でも、文字は理解できんから、学んでいくしかないな」
俊敬はそう言って、地面に視線を落した。
「はい」
悠はこくりと頷いた。喋れるからと言って、気を抜いていると痛い目を見そうだ。少しずつでも文字を読めるように練習しておいた方がいいだろう。
「さて行くぞ」
俊敬は悠を手招きした。
悠は立ち上がりながら溜息をついた。日本に帰るには、まだまだ問題がありそうだ。

十一頁

3

悠と俊敬が村に向かって歩いている途中、前から男が一人歩いてきた。黒い髪の長い髪を一つにまとめた愛嬌のある男だ。顔の雰囲気は猫っぽいが、悠のクラスの女子が見たら喜びそうな可愛さがある。青い着物に灰色のズボンを穿いた男はこちらに気がつくと、黒い瞳を輝かせた。

「俊敬先生。探しましたよ」

男の笑顔を見て、悠は一歩前を歩く俊敬を見た。

(先生?)

式術師を辞めた後は、教師でもしているのだろうか。だったら、一緒に行けないというのもわかる。

「おお。駿来。良いところに来たのう」

俊敬はそう言うと、悠を振り返った。

「李駿来。駿足の駿に来るで、しゅんらいじゃ」

俊敬はそう言うと、次は駿来に方を向いた。

「駿来。この子は、基棟悠と言って、神隠しにあってこの国に来てしまったのじゃ」

駿来は悠の方を向いて、痛ましそうな表情を浮かべる。

「大変だね。神隠しはよくあることだけど、君と同じ格好をした人を見たことがないよ」

「え……」

つまりは、日本で神隠しにあって龍記国に来たのは悠が初と言うことだ。それとも駿来が見たことがないだけかもしれない。

「そうじゃ。駿来。お前さん。確か、桜鈴市に行くと言っていたのう」

「ええ。行きますよ」
駿来はこくと頷いた。
「そうじゃ。ついでに、悠を桜鈴市に連れて行ってくれんか？」
俊敬はぽんっと手を叩いた。
「え？」
駿来は驚いたように目をぱっちりと開いた。
そりゃあそうだ。行き成り、連れて行けといわれても困るだろう。男性の同行者がいれば、悠も安心だが、突然言われて引き受ける人はそうそういない。
「ああ。いいですよ」
駿来は頷いた。
「うん。いい……え。えええええ。いいんですか？」

十二頁

悠は驚いたように駿来を見た。
「うん。冬は畑仕事がないから、俺は桜鈴に行って仕事をするんだ。俺の家はまだまだ小さいの多いから」
駿来はそう言って微笑んだ。
「はあ……」
「それに一人くらいだったら、大丈夫だよ」
と、駿来は請け負った。
「ほう。じゃあ、よろしく頼むのう。駿来」
俊敬は問題が解決したとばかりに笑った。
なんだかわからないが、同行人ができてしまった。物凄くあっさりしすぎて騙されている気がするが、悠を騙したところで一銭の得にならないだろう。
（んー。実は運がいいのかも）
先程、来てしまったばかりだが、言葉にも不自由してないし、桜鈴市に行くにも同行人まで直ぐにできてしまった。運がいいのか、それとも夢なのだろうか。夢の方が悠には有難かったけど、これは夢だと現実逃避するのは馬鹿らしい。夢ではなく、現実であることはわかりきっていることなのだから。
しばらく歩くと、建物が見えてきた。こぢんまりとした建物が十軒ほど並んでいる。
「さて、わしは自分の庵に戻るが、悠のことを頼んでもいいか？」
俊敬は駿来に向けて尋ねた。
「ええ。わかりました」
「ではのう」
俊敬はそう言って二人から離れた。
「じゃあ、行こうか。ええっと、悠さん。悠ちゃん？」
駿来は首を傾げた。

「ああ。悠でいいですよ」
「じゃあ、悠。俺も呼び捨てでいいから」
駿来は人懐っこい笑みを浮かべた。
「そうだ。何か俊敬さんに用があったんじゃないんですか？」
「ああ。いいんだ。特に急用ってわけじゃないから」
駿来は頬を掻きながら答えた。
「そうなんですか」
とてもそうは見えないが、詳しい話を聞くほど親しくもないので、悠は聞かないでおいた。
「ところで悠はどこから来たんだ？」
「日本」

十三頁

「にほん？」
駿来は首を傾げた。
駿来が知らなくても当然だ。この世界に日本と言う国は存在しないのだから。
「ずっと遠くにあるんです」
悠は苦笑した。流石に、異世界から来たのだとは言えないし、言う必要もないだろう。元式術師の俊敬にも言わなかったことだ。それに、異世界から来たと言って信じる人はまずいないだろう。こんな目に遭わなければ、悠だって信じたりしない。変人扱いされないためにも、ここは本当のことは言わないほうがいいだろう。
「ふうん。そっか。でも、あんまり遠いと転光門は使えないんじゃないかな」
駿来は思い出すように空を見上げた。
「てんこうもん？」
「転回の転に光の門で転光門。よくは知らないんだけど、その門を使って神隠しにあった人を国に送ってくれるらしいよ」
駿来はそう言って微笑んだ。
「それって、お金取るの？」
まさかタダでやってくるほど、優しくはないだろう。それに、一銭も取らないなんて怪しすぎる。
「え？　どうだろう。一度も使ったことがないからわからないけど。いちよう、お金は用意した方がいいかもしれないね」
駿来は困った顔をする。
「んー。じゃあ、桜鈴についたら一緒に働く？　たいして貰えないけど、お金があった方が安心するだろう。そうだ。今、どれ位持ってるの？」

「一銭も持ってない」
財布には四千円入っているが、日本の紙幣なんてこちらではただの紙切れだ。鞄を持ったままこちらに来たのはいいもが、金目の物は一切入っていない。これで、金でも入っていれば役にたったのだろうが、所詮はただの高校生だ。そんな物、持っているわけがない。
「そっか。じゃあ、桜鈴で働けるように頼んでみるよ」
「あっ。でも、桜鈴に連れて行ってもらうだけ十分ですから、あんまり迷惑はかけられませんし」
悠が慌てて言うと、駿来が手を振った。
「いいんだよ。気にしてないで。俺の家の方針だから」
「方針？」
「うん。困っている人は助けるって言うね」
と、駿来は微笑んだ。

十四頁

「あ。ありがとうございます」
悠はぎこちなく微笑んだ。現地の人が面倒みてくれるのは助かるのだが、やはり居た堪れない。駿来の親切に悠は何も返してあげることはできないし、裏がない親切はどうもむず痒い。
「早く帰るといいね」
駿来に言われて、悠はこくりと頷いた。
だが、本当にその転光門で日本に帰れるのだろうか。その転光門が使える範囲は広くはないみたいだ。詳しく知らない駿来が遠いと行けないと口にしているだけだから、本当のところはわからないが、異世界にまで転光門が通じているとは思えなかった。
（異世界なのよね）
俊敬と駿来に親切にしてもらったが、帰れないと言う可能性も十分になるのだ。いや。むしろ、帰らない方が帰れるよりも確率は高いかもしれない。
「大丈夫。きっと帰るよ」
と、駿来が力強く言った。
「あっ。はい」
どうやら不安そうにしていたのが、顔に出ていたらしい。悠は反省しつつも、笑顔を浮かべた。
「んー。俺の家は男ばっかだから、悠に合う服があるかわからないけど、少しくらい大きくても平気だよね」
「ええ。大丈夫……って、そんなの悪いですよ」
道案内から仕事の紹介まで、駿来にしてもうわけにはいなかい。服くらい自分で調達しない悪いし、何より服ならこの制服を使い回せばいいだけのことだ。
「でも、その服じゃ目立つから用意したほうがいいよ」
「うっ。まあ、そうですよね」

駿来にじっと見られて、悠は下を向いた。やっぱり制服は目立ちすぎるのだろうか。元の世界では気にもしない制服姿だが、誰一人として洋服を着ていない中では異様なのだ。全て甘えてしまうのは嫌だが、今の悠では何もできないのは確かだ。
「あの。後でちゃんと洗って返しますね」
「ああ。うん。あんまり気にしなくてもいいよ。たいしたことないし」
駿来はそう言って手を振った。
「あっ。もうそろそろ着くよ」
駿来は笑顔で指差した。
指差した先に悠が目を向ければ、一軒のこぢんまりとした家が建っていた。
「さあ。行こう。皆に紹介するよ」
悠は駿来の言葉に頷いて、家を目指した。

4

「これでよし」
俊敬はそう言って筆をおいた。流暢な字で書かれている紙を折り、封筒にしまった。
「後はアイツが勝手にするだろう」
俊敬は溜息をつく。

「先生」

と、駿来が元気よく窓から顔を出した。
「おお。駿来か。悠はどうしとる？」
俊敬は微笑んだ。
「今は皆と話してます。その間に、先生と話しておこうと思いまして」
駿来は真剣な表情をしていた。
「そうか。そうじゃ。これを悠に渡しておいてくれ」
俊敬は手紙を駿来に渡した。
「わかりました」
駿来は手紙を受け取って、悩むように頬を掻いた。
「それで、なんのようかのう」
「ああ……いえ。なんでもないです」
駿来は手を振った。
「よいのか？」
俊敬は首を傾げた。
「ええ。いいです。急ぎの用じゃないですから」

駿来は言いたいことを呑み込んで、首を横に振る。
「そうか。まあ、好きにするとよいじゃろう」
俊敬はそう微笑んだ。
「はい」
駿来は頷いた。少し名残惜しそうにしながらも、駿来は頭を下げた。
「それではこれで失礼します」
「ふむ。気をつけてのう」
俊敬の言葉に駿来は笑顔で頷き、俊敬の庵を後にした。
その頃、悠は駿来の家族に囲まれていた。

十六頁

（えっと……）
悠は椅子に座りながら、異様なまでの歓迎ぶりに戸惑っていた。駿来の母親は、もの凄く楽しそうに悠が着ていく服を選んでいる。駿来の家は男が多いらしく、女の子の服を選ぶのは久し振りだと嬉しそうに駿来の母親が語っていた。因みに、女の子の服を選ぶのは長男の結婚式以来だそうだ。
「あ、あの。そんなに気をつかわなくてもいいですから」
悠はいそいそと箪笥から服を取り出している駿来の母を見て言った。
「あら。そんなつもりじゃないのよ。全然」
と、輝く目を悠に向けた。
「は、はぁ」
気をつかわれていると言うよりは、遊ばれている方が正しいのかもしれない。
「お母さん。これなんかどうでしょう？」
長男の嫁さんが、目を輝かせながら言った。
その姿を見て悠は肩を落とした。あの楽しそうな目を見る限り、遊ばれているのは言うまでもない。まるで、新しいお人形を手に入れた乙女である。
（あー。なんか。居場所がない）
悠は楽しそうに洋服を選んでいる二人を眺めて溜息をついた。丁度、下を向いた時に、こちらを覗き込んでいた二つの目と目が合った。
「あっ」
悠が思わず息を漏らすと、その少女はびくっと飛び上がった。黒髪を二つにしている可愛らしい女の子は、よく見てみると駿来に似ている。

「こんにちは」
悠が挨拶をすると、女の子はぺこりと頭を下げた。女の子は警戒しているのか、悠の手の届かない距離で悠を観察していた。
（んー。歯がゆい）
大きな黒い瞳いっぱいに自分が映りこんでいるのを見るのは、これが初めてだ。近づかないながらもじっと見ているということは、悠のことが気になっているのだろう。そこまで珍しい存在だとは悠には思えないのだが、別の世界から来ている以上、珍しい存在なのだろう。
「ただいま」
駿来が元気よく戻ってきた。
女の子は駿来が帰ってくると、だっと走り出し駿来に抱きついた。
「おっ。しゅんりん。どうした？　いつもは俺のところなんか来ないのに」
駿来は女の子の頭に手を置いて首を傾げる。
「……なんとなく」

十七頁

「ふうん。あっ。悠。これが俺の妹でしゅんりん。春の鈴って書いて春鈴って言うんだ」
駿来は春鈴を悠の前まで連れてくる。
無理矢理連れてこられてた春鈴は、駿来にしがみついて嫌そうにしている。
「あ。うん。あの、離してあげたら」
思わず悠が引くほどの拒否反応を春鈴は示している。まだ、殴ってはいないが、表情がすっごく嫌そうだ。
「んー。あはは。春鈴は俺の事が嫌いなんだよ」
駿来は笑いながら言った。
けして笑いながらいう台詞ではないが、春鈴の表情を見れば明らかである。駿来は春鈴を離して、ぽんぽんと頭を叩いた。
春鈴は直ぐに離れて舌を出す。
「べー」
と、春鈴は駆け出した。
「えーと」
悠はどう言っていいのかわからずに、戸惑ったように呟く。
「あはは。元気だなぁ」
駿来はのんびりと言うと、悠の隣に腰を下ろした。
「ごめんね。すっかり、姉さんも母さんも夢中になっちゃってさ」
駿来は母親と長男の妻を見て苦笑した。
服を着る本人を放っておいて、駿来の母と長男のお嫁さんは活き活きと服を選んでいる。
「あー。ううん。別にいい。それに……」
それに、なんだか羨ましい。家族という家族を持たない悠にとっては、この光景は新鮮でもあり、寂しい気もする。確かに、灯葉や色んな人に支えられながら今まで何不自由もなく生活してこられた。

今の生活に不満を抱いたことはない。それに、何の関わりのない灯葉が今まで捨てずにここまで育ててくれたのだ。悠が不満に思うなんてことはまずない。でも、やはりそれとこれとは別だ。母親や父親が悠にはいない事を寂しいと思うのは。

「悠。どうしたの？」

はっと気がつくと、目の前に駿来の顔があり悠は慌てて顔を上げた。

「なんでもない。私の家は家族が少ないから、にぎやかだなって思って」

悠は取り成すように手を振った。

「そっか。そうなんだ。俺の家は大人数だから結構騒がしいけど、悠の家は静かなんだ」

駿来は興味津々な表情をしている。

「うん。静か」

バイトであまり家にいない悠だが、灯葉もあまり喋るほうではない。まあ、話し出すと結構長くなるが。静かにしてないと駄目とかではないから、テレビもラジオも音楽も聴いているから、煩いと言ったら煩いかもしれない。

十八頁

しかし、所詮はテレビやラジオは流れているだけで、家に人がいる訳ではないから、寂しいと言ったら寂しいのだろう。悠はあまりそう言うことは気にならない性格なので問題はない。それに、どちらかと言ったら静かな方が好きである。

「そうなんだ。俺はちょっと耐えられないかも。家にいる時も、桜鈴市にいる時もにぎやかだからさ」

駿来はぽりぽりと頭を掻いた。

どうやら駿来は静かよりもにぎやかな方が好きなタイプらしい。

「ふうん」

悠がそう呟いた時、唐突に肩を掴まれた。

「はいっ？」

「ふふふ。ちょっといいかしら？」

駿来の母親が不気味な笑みを浮かべて、悠を見つめていた。

「な、なんでしょうか？」

悠はかなり動揺しながら答えた。明らかに怪しい。何か企んでいる。

「そんなに警戒しなくてもいいわよ。大したことじゃないから。ちょっと服の大きさをね。適当に組み合わせていたけど、大きすぎたら問題だものね」

と、駿来の母親は苦笑した。

「そうですね」

確かに服のサイズは大切だ。大きすぎても小さくても動きにくい。悠にぴったり合うサイズがあるかはしらないが、確認はしておくべきだろう。

「じゃあ、俺はどっか行ってくるね」

駿来が椅子から立ち上がった。

「ちょっと待って。これが終わったご飯にするから、皆呼んできて」

駿来の母は、駿来に命令した。
「わかった。行ってくるよ」
駿来は元気よく言って、部屋から出て行った。
「さっ。じゃあ、始めましょう」
と、駿来の母親はふふっと笑う。
「はぁ」
悠は引きつった笑顔を浮かべた。
その後、悠は散々色んな服を着替えさせられたのだった。

二章　放浪の式術師

1

翌日の早朝、悠と駿来は駿来の家を発った。制服を鞄にしまった悠は、桃色の上着に黒いスカートを変わりに着ていた。卒業式に着る袴に似た服であるが、袴とは違って帯はなく、白い紐で結ばれているので苦しくはない。靴だけ自分の物を使っている。移動手段が歩きしかない状態では、慣れた靴の方がいいに決まっている。それが、ローハーでもだ。

「それで、桜鈴市まではどれくらい掛かるの？」

隣を歩く駿来に問い掛ける。

「んー。俺一人だと一時間半くらいかなぁ。でも、悠がいるから二時間？」

駿来は首を傾げた。

（適当だなぁ）

一人増えたから三十分おおく掛かるなんて適当だ。悠と駿来では歩く速度が違うのだから、三十分だけ増やして二時間では着かないと思う。

「あー。でも、悠は足速そうだから、そんなに掛からないよ」

と、笑う駿来を見て、悠は脱力する。のんびりと言うか、おっとりしていると言うか。別に頼りない感じではないが、貪欲ではないなそうだ。金には執着しているぽいが、それも家族のためであって、自分のためではない。悠みたいにお金が一番ではなさそうだ。

（いい人なんだろうけど）

悠はじっと駿来を観察する。駿来も彼の家族もとてもいい人である事は、悠自身で証明されたものだが、ちょっとお人よしが過ぎる気もしないではない。灯葉もそうだが、少しは自分の事を優先する

べきだと悠は思う。彼らのお人よしで助かっている悠が言っていいものではないかもしれないが。
「そうだ。悠はこの国に着たばかりでわからない事だからだよねぇ。何かわからない事があったら何でも言ってよ。俺の答えられる範囲で答えるから」
駿来はきらきら輝く笑顔で言った。
「あー。うん」
悠はぎこちなく笑う。素直に好意を受け取ればいいのに、それができずに悩む姿は馬鹿そのものだ。だが、どうしても彼らのお人よしに付け込んでいる気がして嫌なのだ。
悠は首を振る。そんな事を考えてもしかないし、それよりも気になる事が悠にはあった。
「ねぇ。妖怪って本当にいるの？」
神がいるなら、妖怪がいてもいいのだろうが、どうしても悠には妖怪がいるなんて考えられない。そもそも神の存在ですら信じていないのだ、などと色んな処から怒られるかもしれないが。

二十頁

「ああ。うん。いるよ。悠はあったことない？」
駿来は当然の事のように言う。
「ない」
と言うか、誰でも見れるんだ。関心と言うか、なんと言うべきかわからないが、日本では見える人にしか見えないそうな妖怪が誰にでも見れるとは驚きだ。
「でも、大丈夫だよ。こんな朝早くから出で来ないから」
「ふうん」
駿来の言葉に悠は目を逸らす。とりあえず、今出て来ない事に安堵する。いや。会ってみたい気もしないではないが、百鬼夜行画に出てくる妖怪が現れでもしたらドン引きだ。昔、灯葉の本棚で絵を見たが怖くて泣いた事がある。
それから、桜鈴市に着くまでの間、悠と駿来はくだらない世間話とやらとしながら歩いていた。

「あー。暇」

悠は店の柱に寄りかかりながら、空を見上げていた。
桜鈴市についた悠と駿来は先ず、駿来の仕事先である飲食店に挨拶をしに来たのだ。一通り挨拶を終えると、昼ご飯をその店で食べることになった。昼ご飯を食べる前にいつも泊めてもらう家に挨拶をしてくると駿来は店を離れた。本来なら、一緒に行くべきなのだろうが、相手を驚かせないために、悠は一先ず店で待つ事になったのだ。
とは言え、ただ待っているだけなのは暇で、店の前をうろうろしていた。店で待っていてもよかったのだが、何も注文せずに居座っているのは邪魔かと思い店を出たのだ。だが、うろうろと店の前を

歩き回っているのも怪しいかと思い、店の端で待つ事にしたのだった。
甲記村とは違って、人が多い。と言っても、東京の街ほどではなく、東京と田舎の真ん中辺りの多さだろう。
「あれ？　もしかして、一人なの？」
声の方を向くと、見るからにチンピラだとまるわかり男が二人いた。説明するまでもなく、ついていったら危険であろう事がわかる二人組みを見て悠は対処に困った。このまま無視するか、それとも返答するか。
「もしかして誰か待ってるのかな？」
にやにやと言う笑う男達を見て、悠は内心で溜息を落とした。異世界と言えど、口説き文句はあまり変わらないのかもしれない。それか、悠の持つ翻訳機が悠の耳慣れた言葉に直しているから同じに聞えるのだろうか。

二十一頁

「ねぇ。だったら、その待ち人、一緒に捜しに行こうか？」
何故、捜しに行こうなのだろう。普通だったら、そんなやつ待ってないで俺達どこか遊びに行こうではないか。疑問に思うも、一度もナンパされたことのない悠には現在のナンパ事情など知らない。
大抵、物語ではチンピラに絡まれると助けが来るが、現実はそうじゃない。追っ払うべきだと判断した悠が口を開いた途端、別の声が場を満たす。

「それは困るなぁ。その方には私も用があるんだ」

と言う声の方を見ると、黒いチャイナ服に似た上着に白いズボンに灰色のマントを着た男が立っていた。
悠はその男の顔を見て、目を開いた。
東洋系の顔立ちが多い龍記国では一度も見た事がない金色の髪に青い瞳だ。顔立ちも西洋系の美形である。男は金色の髪を耳の下で束ねて前にたらしている。
「お前は？」
男の一人が訝しげに、金髪の美形を見た。
「ああ。喧嘩なら止めた方がいい。これなんだかわかるよね」
と、男は灰色のマントの止め具を男達に見せた。
すると、男達は押し黙った。
悠からしてみると、五角形の中に星の上に一匹の龍が彫られているだけの止め具に過ぎないのだが、男達にとっては違ったらしい。
男達は、苛立たしげに金髪の男を睨み付けたが、そのまま黙って立ち去った。
男達がいなくなると、その金髪の美形が悠に近づいた。
「こんな所で何をしているのです。巫女様」

真剣な表情の中に悠を責める色が混じっている。
「はぁ？」
悠はきょとんっと間抜けに口を開けた。
その反応に男は、どこはほっとしたように頷いた。
「ああ。よかった。別人で。まぁ、本人がこんな所にいるわけもないか」
と、安堵の息を吐く男を見て、悠は男の知り合いに間違われたのだとわかった。
「ああ。でも、本当によく似ている」
男はぐいっと顔を悠に寄せる。
「はぁ。そんな似てますか？」

二十二頁

悠が困惑しながら尋ねると、男は深々と頷く。
「ええ。とってもね」
「はぁ」
まぁ、そんな事もあるだろうと悠は一人納得した。
だが、男は何か気になる事でもあるのか、じっと悠の顔を見ている。
「あの……」
かなり迷惑だが、どう言っていいものか悩んで悠が中途半端な声を上げると、男は悠から少し離れた。
「ああ。失礼しました。俺は放浪の式術師で峰伽黄（ほうかおう）といいます」
伽黄は頭を下げた。
「ああ。基棟悠です」
放浪の式術師とは何かと突っ込み前に、伽黄のお辞儀に悠は反射的に答えた。
「悠さんですか。人を待っているそうですが、俺も一緒に待っていてもいいですか？」
「は？」
伽黄の申し出に悠は素っ頓狂な声を上げる。先程、声を掛けられた男達と同じ様な事を言っている気がしたないらないのだが。
「ああ。大丈夫ですよ。どっか連れ去ったりしませんから。ただ、一人で待っているのは危険かと思いましてね」
と、伽黄はにこやかに笑う。
「はぁ」
どうもその伽黄のにこやかな笑みが胡散臭い。
「待っている間に何か食べてますか？　お金なら俺が払いますよ」
「……」
悠は十秒くらい考えて、口を開いた。

「じゃあ、このお店で」
と、指差したのは、駿来がいつも働いている飲食店である。
「……では、そう言う事で」
一瞬、伽黄の言葉が遅くなったのは、悠がすんなり承諾したからだろう。
まぁ、悠も悩んだ事は悩んだのだ。でも、代金は払ってくれると言う魅力と、色々と聞きたい事が重なってつい頷いてしまったのだ。悠の悪いところでもあるが、お金を払わなくてもいいというのはかなり魅力的なのだ。それに、食べるのは駿来が働いている店だ。何か問題があっても、駿来が戻ってくるからなんとかなるだろうっと思ったのだ。
その安易な考えが悠の人生……いや、駿来の人生を動かすことになるなどと、この時の悠は欠片も思っていなかった。

二十三頁

2

どうしてこうなったのか、答えは全て自分のせいだ。
悠は机に並ぶ料理を見て溜息をついた。この国の文字が読めない悠は、いくらメニューから好きな物を選んでいいと言われても選べない。貴方のお勧めにするっとしか言いようがなかった。それを聞いた伽黄が意気揚々と料理を頼みまくったのだ。一品、一品の量はそう多くないが、いくらなんでも十五品は頼みすぎである。
「あの。頼みすぎなんじゃ……」
悠は上目使いで伽黄を見る。
「でも、後一人来るなら大丈夫ですよ」
と、伽黄はにこやかに笑う。
どうもその笑顔が胡散臭くてならなかった。やっぱり誘いに乗るんじゃなかったと、悠は後悔した。悠は並んだ料理を見て、どれから食べようか悩み出す。どれだけ怪しかろうと、食べる時には食べておかないともったいない。それに、お金は出すと言っているのだ。食べないと損である。
「そうだ。放浪の式術師ってなんですか？」
何気なく聞いたつもりだったのに、伽黄が酷く驚いているので、悠は慌てて弁解する。
「あっ。いえ。私、つい最近のこの国に来たので、よく知らないんです」
その弁解の仕方もどうかと思うが事実だ。まだ、嘘を言うよりマシだと、悠は自分を納得させる。
「つい最近ですか。それはいつです？」
「……昨日」

悠は馬鹿真面目に返答する。
「なるほど。神隠しに遭われたのですね」
いくらなんでも察しが良過ぎだと思いながらも、悠は頷く。
「そうです」
「じゃあ、ここには転光門を求めて来たのですね。大変でしたでしょう。大分、遠い国から連れて来られて」
「いえ。助けてくれる人達がいたので、そこまでは大変ではないです」
確かに、ただ見知らぬ土地に来てしまったら大変だっただろう。それも、俊敬達に会ったお陰だ。彼らと出会っていなかったら、今頃どうなっていたことやら。想像するとぞっとする。
「それは、運がいい。でも、転光門を使うには、何の伝もないと大変ですよ」
「え？」

二十四頁

「まぁ、別に使えないわけはありませんが。手続きに時間が掛かります」
あまり考えてなかったが、国の機関を使うのだ。やはり、簡単に使わせてもらえるわけがない。だが、悠には伝がある。俊敬の。
「いえ。大丈夫です。知り合った元式術師さんに紹介状を書いてもらいましたから」
悠がそう話すと、伽黄は何故か真剣な表情になる。
「それ見せてもらってもいいですか？」
「え？　別にかまいませんけど」
そう言いながら、悠は少し警戒する。先ほどから、こちらの事ばかり話していて、伽黄の事が一切出てこない。素直に答えるからいけないのかもしれないが、ちょっと不満だ。悠はしぶしぶ俊敬から預かった紹介状を伽黄に渡した。
伽黄はその紹介状を呼び始めると、ぶるぶると震え始めた。
（何？）
そんな変な事は書いてないはずだ。ただの紹介状なのだから。
だが、伽黄は今にもその紹介状を破り出しそうな勢いある。
「あの……馬鹿……」
言葉が出て来ないほど伽黄は怒っている。
（えええ？　何書いたの）
悠が思わず不安になるほど、伽黄の怒りは大きい。
丁度その時、店に駿来が顔を出した。
「あれ？」
駿来が驚きの声を上げて、悠の方を見ている。
「あっ。駿来。この人は放浪の式術師で峰伽黄さん」
悠は駿来に伽黄を紹介する。
「放浪の？」

駿来は怪しむように伽黄を見つめた。
「初めまして。基棟さんの知り合いの方ですか？」
伽黄は先ほどの怒りがなかったかのような笑顔を駿来に向けた。
「李駿来です。放浪の式術師の方が何故、悠と食事をしているのですか？」
駿来は悠の隣に座りながら、警戒心たっぷりに伽黄を見つめる。
「男達に絡まれてたいたところを助けてもらったんだけど」
悠は少しだけ戸惑ったように説明し始めた。
「んー。でも、なんで一緒に食事を？」
駿来の疑問ももっともだ。
「えっと、それは一人で待ってるのは危ないから？」
悠は何故か疑問系で答えた。

二十五頁

「基棟さんは確かとても遠くから来られたそうですね？」
伽黄は突然、悠に話しかけた。
「ええ。そうですけど」
「ここの市の転光門では無理かもしれません」
「はぁ？」
伽黄の言葉に悠は身を乗り出した。
「基棟さんの国は俺が聞いた事もない国だそうですね」
悠はこくと頷いた。寧ろ、この世界の誰も知らない。
「本来、転光門は放浪の式術師が移動するために作られたものです。例えば、ここ桜鈴市から王の都龍斗市（りゅうとし）に行くとします」
伽黄はお茶碗を二つ持った。
「こっちが桜鈴市として、こっちが龍斗市としましょう」
伽黄は茶碗を市に見立てて机に置いた。
「はぁ」
悠はお茶碗を見て頷いた。
転光門の事をよく知らないと言っていた駿来も真剣に話は聞いているが、何か含むところがあるのかじっと伽黄を見ていた。
「桜鈴市と龍斗市を転光門で繋げるには、術者と転光門を通る者が龍斗市を知っている必要があります。どちらか一方が知っているだけでは、目的にはつけないのです。通る者は知っていて当然ですが、術者が知らないと致命的ですね」
「どうしてです？」
悠の質問に伽黄はくすりと笑う。
「繋げる者がその場所を知らないのでは繋ぎようがありません」
「そうですね」
今一ピンっと来ないが、タクシーの運転士が目的地を知らないと、依頼者を目的地まで連れていけないのと一緒ということだろう。悠

は例えに納得して、うんうんっと頷く。そして、頷いてから、自分の置かれている状況を理解して凍りついた。
（誰も知らないじゃん！）
悠以外、日本と言う国を知っている者は一人もいないのだ。どれだけ転光門が優れていようが、繋げる者が誰もいないのでは意味がない。
（ちょっと）
寧ろ、転光門で帰るのを諦めて、神様とやらを探し回らなければいけないのでは。
（ムリムリ）
どう考えたって、そんな人外な者を見つける手立てが思いつかない。そもそも、神様なんて大物人前に現れるものなのか。
（いやー）
心の中で絶叫する悠を尻目に、駿来と伽黄は話を続けていた。

二十六頁

「そんな話聞いた事がないけど」
駿来の疑いの声に、伽黄はにっこりと笑う。
「君は式術師ではないのだろう。だったら、君には転光門がどう言う仕組みで動いているかは知らないはずだ」
「それは……」
「俺の事が信用できないなら、君の知り合いの式術師に尋ねればいい。俺と同じ事を言うだろう。それに、君の知り合いの式術師には俺も興味がある」
伽黄の瞳が一瞬、怒りで彩られたが、直ぐに消えたために誰も気がつかなかった。
「少なくとも、ここの式術師では彼女を国に送る事はできないとね」
伽黄はそう言って微笑んだ。
明らかに警戒している駿来を見て、伽黄は溜息を落とす。
「例え、龍斗市に行ったとしても、必ずしも基棟さんの国を知っているとは限りませんが。でも、龍斗市には五色がいますから」
伽黄は少しだけ困ったような表情をした。
「五色に俺達のような平民が会えるとも？」
「会えますよ。俺の師ですから」
悠は駿来と伽黄の言葉を聞きながら、首を傾げた。先ほどから悠の知らない単語が出てきているが、二人とも説明する気はないらしく、放置されたままだ。
（えーと）
悠が声を掛けるか悩んでいると、駿来が溜息をついた。
「どなたが？」
「峰海吏（ほうかいり）。五色の黒の君」
「黒……」
駿来はふっと口を開けたが、言葉が出る前に口を閉じた。

「では、行ってみますか？　龍斗市に」
伽黄はにっこりと笑う。
何故か、悠が決めるべき事なのに勝手に話が進んでいる。
（いや。だから、放浪の式術師って何？）
他にも五色とか知らない事がたくさん出てきた。頼みから少しくらいは説明して欲しいと、悠は心から思ったのだった。

二十七頁

3

悠は項式寮の朱雀省支部に向かう間に駿来から気になっていた事を尋ねていた。

「放浪の式術師って言うのは、村と村を移動して回る式術師をそう呼ぶんだ。村々に式術師が一人くらいはいたりするんだけど、いない場合もある」

駿来は悠に説明しながらも、少し前を行く伽黄を気にしていた。

「うん」

悠はこくと頷いた。

「それで、それぞれ自分の出身省を回るんだ。それをまとめているのが、朱雀省支部だよ。だから、支部で働いている式術師はそんなに多くないんだ」

式術師は五年間、項式寮の本部で修行して一人前として認められたら、これからの事を決める事になる。自分の故郷に帰るか、放浪の式術師として出身省を回るか、項式寮に残るのか、この三つから選ぶのだ。

「ふうん。それで、五色って？」

「五色って言うのは、式術師の一番偉い人。紫の君が五色のまとめ役をしていて、他の三色の君を十年以上勤めた事のある者しかなれないんだ。それで、紫他に青、赤、黄、黒があるんだよ」

「なるほど……って。そんな偉い人と知り合いなの？」

悠は驚いたように伽黄を見る。項式寮がどれほどの規模を持っているかいまいちつかめていないが、一番偉い人達にそんな軽々と会えるわけがない。高校の校長先生とは違うのだから。いや。校長ともそんなに会えないが。ようは悠が知事に会うのと同じくらい難し

いはずだ。
「あー。うん。式術師の試験に合格した者は、項式寮の本部で五年間修行するんだけど、講師として五色がたまに教える事があるみたいだよ。それで、気に入られたら五色の下で修行できるんだって」
多分それだろうと言う駿来は自信なさそうだった。それも仕方ない事だ。駿来は別に式術師ではない。項式寮の内部に詳しくなくて当然だろう。
「ふうん」
悠はじっと伽黄を見た。五色の一人に気に入れられるほどの力を持っているのか、それとも伽黄の性格が気に入れられたのか。これ以外の要素かもしれないが、一番偉い人に気に入れられるタイプにはどうも思えなかった。失礼と言ったら、失礼かもしれないが、見えないのだからしょうがない。
「でも、黒なんだよねぇ」
駿来はぼっそりと漏らす。

二十八頁

「黒だと問題があるの？」
悠は不思議そうに駿来を見つめる。
「あー。いや。問題はないんだよ。ただ」
駿来は伽黄を見つめて、頭をかく。
「もしかしたらって思って」
悠は首を傾げた。駿来が何を言いたいのかさっぱりわからない。
「あ。ほら、着いたよ」
駿来はその建物を指差した。
その建物は俊敬の言ったとおり、赤の屋根がとても印象的だ。周囲を高い塀で囲まれていて門の上にある看板には難しい漢字で書かれていて悠にはさっぱりわからない。ここが項式寮の朱雀省支部だと知らなければ通り過ぎてしまいそうだ。俊敬が言っていた朱雀は建物の壁に彫りこまれている。この鳥が朱雀と知らなければ、ただの赤い鳥にしか思わなかっただろう。美術が壊滅的に駄目な悠にとって、再現しろと言われれば不可能としか言いようがないほどの美しさだ。きっと職人が見たら涙ものなのだろう。悠の知った事ではないが。
伽黄は建物に一切の感心を寄せずに建物の奥へと入って行く。悠達も大人しく伽黄について行った。
中は意外にあっさりしたもので、受付と見られる机に一人男がいるのみだ。後は奥に続く扉と右の方に続く廊下がある。
伽黄は特に何も言わずに、奥の扉を開けてしまう。
「え？　いいの？」
悠は隣を歩く駿来に焦って問い掛けた。
「うん。扉を開ける前に何か見せてたから平気だよ。きっと、身分を証明してくれる物なんだよ」
と、駿来は微笑んだ。

「そ、そう」
いくら伽黄が放浪の式術師だからと言って、証明一つ見せただけで通すのは問題がある。少なくとも悠の世界では考えられない。
悠は戸惑いながらも伽黄の後に付いて行く。
庭に築かれた廊下を通り抜けて、三角形の赤い屋根の茶色い扉の奥には天井から水が流れていた。
「ここは？」
悠は辺りを見回した。周囲の壁には鏡が取り付けられている。床には何や青い色で丸が描かれている。
「ここが」
駿来も悠と同じく辺りを見回しているが、悠とは見方が違う。この部屋の機能をしっかりと把握していて、感動している表情だ。

二十九頁

「そう。ここが転光門です」
伽黄は悠と駿来を見て微笑んだ。
「ここから龍斗市に行くわけですが、二人とも行ったことがないのでしたね」
「そう」
「ああ」
と、悠と駿来は頷いた。
「では、この布を持ってください」
伽黄が差し出したのは白い布だ。
「どうして？」
悠はじっと白い布を見て尋ねる。
「迷わないためにですよ。この布を離した目的地に着けず永遠に彷徨うことになりますから、離さないでくださいね」
伽黄はにこやかに言う。
彷徨うって何処にっと聞きたい気もするが、なんだが怖くて聞けなかった。それに、どうせ説明されてもよくわからないのだ。ならば、聞かなくてもいいかと思う。世の中には知らない方が幸せって事がよくあるのだ。悠は疑問を頭の隅において素直に布を握る。
駿来も同じく黙って布を掴んだ。
「さて。じゃあ、お願いします」
伽黄は扉の外に呼びかけた。
声の反応するように扉が閉められた。天井の穴から光が差し込み鏡によって、光が反射していく。やがて光は天井から漏れ出す水に集まり、水の中央部分にぽっかりと穴が開く。
「はい？」
悠はがっぱっと口を開ける。悠がいた世界では考えられない現象だ。科学的に証明しろと言われてもちょっと無理だ。一介の学生で

はできるはずもない。それに悠は理科が苦手だ。
「じゃあ、行きますよ。絶対に布を離さないでくださいね」
伽黄はまるで近くのお店に行くほどの軽いテンションで進んで行く。
絶対に進みたくはないが、ここで止まるわけにも行かず、悠は仕方なく足を進めた。とにかく、絶対にこの布だけは離さないようにしようと固く誓った。
何も見えない真っ暗な空間をただ進む。目の前の駿来が見えないことよりも、この先に出口があるのか不安になる。確かなのは掴んでいる布の感触だけだ。頼りない布の感触だけに身を委ねるのは心許ない。
不意に目の前が光で溢れる。眩しさに悠は目を閉じた。

三十頁

「ああ。着きましたよ」
との伽黄の言葉に悠は目を開ける。
目の前に広がっているのは池だ。
悠が辺りを見回す。池には橋が掛かっており、その中心部分に悠たちはいるみたいだ。後ろを振り向くとそこには壁があるだけだ。
「何？」
「転光門が閉まったんです。さぁ。こちらですよ」
そう言って伽黄は右側を指差す。
悠と駿来は伽黄の後を付いて歩き出した。
悠は歩きながらこの場所を観察する。どこかの屋敷である事はわかる。池を挟んで屋敷が建っている。どちらが母屋かは知らないがとても広いことはわかる。日本では一部のお金持ちしか住めないであろう広さがあると思う。だが、敷地が広いだけで建物は質素だ。先ほどいた項式寮の朱雀省支部の方が派手だ。建物の美しさよりも使いやすさを取った感じだ。
靴を履いたまま家の中に入る違和感を覚えながら悠は黙って歩いていると、前から一人の少女が慌てたように走ってくる。
「鈴明（りんめい）どうした？」
伽黄はその少女に呼びかけた。
鈴明と呼ばれた少女は丸い大きな瞳が印象的で、黒髪の髪をお団子にしている。
「はい。先ほど、項式寮から使いの方が来られました。門の前で妖怪が暴れているそうです。それを退治して欲しいとのことです」
鈴明は元気よく答えた。
「はぁ？　そんなの下っ端にやらせとけばいいだろうが」
「その下っ端では退治できないそうです」
鈴明は困ったように微笑んだ。

「そうか」
伽黄は軽く眉を上げた。
「この二人を頼む客人だ」
「はい。わかりました」
鈴明は笑顔で頷く。
伽黄はそれだけ頼むとすたすたと歩いて行く。
おいて行かれた形となった悠は駿来と目を合わせる。駿来も同じく戸惑っているようだ。
「直ぐ帰ってきますよ。こちらで待っていてください」
戸惑っている二人を見て鈴明は笑顔で答えた。
悠はその笑顔を見てはぁっと溜息をついたのだった。

三十一頁

4

伽黄において行かれた以上、ここで伽黄を待っているしかすることがない悠と駿来は大人しく部屋でお茶を飲んでいた。
「はぁ。普通、放置したりしないんじゃないの？」
悠はお茶を飲みながら愚痴をこぼす。
「そうだよね」
駿来は居心地が悪そうに部屋を見渡す。
「どうかしたの？」
「ああ。うん。ちょっとね。なんか広すぎて落ち着かなくて」
「ああ。わかる気がする」
確かに、こんな広い屋敷に悠も来るのは初めてだ。とは言え、屋敷全体の広さを見たわけではないから正確な広さはわからないが。
「はい。お菓子をお持ちしました」
にこにこと鈴明は笑みを浮かべて現れた。手に持っているお皿の上には菊の花の形をしたお菓子が四つばかり乗っている。
「菊花酥（きっかす）ですよ。パイに餡を包んだお菓子です」
それは何と言う目で悠が見ていたのがわかったのだろう。鈴明は説明してくれた。
「ふうん。あっ。そう言えば、まだ名前を聞いてませんでしたね。私は基棟悠って言うの。あたなは？」
はっと思い出して尋ねると、鈴明は少し困った顔をした。
「私は甲鈴明（こうりんめい）です。私は使用人の身なので、敬語は使わなくて結構ですよ」
「使用人……」
「はい」

にっこりと笑う鈴明を見て悠は驚愕した。
（使用人だってえええ）
そんなの見たことも聞いたこともない。それはちょっと言いすぎだが、テレビのドラマくらいでしか見たことない。
隣に座る駿来は驚くことなく、むしろ納得しているようだった。
「えー。驚かないの？」
悠は駿来の服を引っ張って、小声で話しかける。
「うん。だって、ここ五色の屋敷だよ。使用人がいてもおかしくない」
「う。なるほど。ってなんで知ってるの？」

三十二頁

まだ誰もここが五色の屋敷だと言っていない。
「え。ああ。彼の師が黒の君だから、ここは黒の君の屋敷だと思って」
そうですよねっと鈴明に駿来は問い掛けた。
「ええ。そうですよ。黒の君のお屋敷です。多分、伽黄様は直ぐに帰ってくると思いますよ」
答えて鈴明はお皿を机に置いた。
「伽黄様はあの伽黄様ですか？」
駿来はよくわからないことを言う。
だが、鈴明には思い当たる節があるのかあっさりと頷く。
「そうですよ」
「そうですか」
駿来は鈴明の答えに溜息をついた。
「ん？　何？」
悠が一人ついていけずに駿来に尋ねると、駿来は困ったように頭をかく。
「悠にとってはすごくいいことだと思う。でも、なんでそんな大物が桜鈴市いたのか理解できない」
「そうでしょうね。普通ならありえませんから」
うんうんっと頷く鈴明を見て悠は首を傾げた。
「ん。だから何が普通じゃないって？」
その質問に駿来と鈴明が答える前に、別の人物が声を掛ける。
「何の話だ？」
あれから十五分も経っていないはずだが、扉の前で不思議そうな顔をした伽黄が腕を組んでたっていた。
「あっ。お帰りなさいませ。伽黄様」
鈴明は頭を下げた。

「ああ。俺が行くまでもないだろ。あんなの」
伽黄はそう事実を告げて席に着いた。
「それで、一体何の話をしていたんだ？」
つい先ほどまであった丁寧さを捨てて伽黄は駿来を見る。
きっとこちらが地なのだろうと悠は一人納得する。
「別に。ただ伽黄様みたいな方が、桜鈴市にいるなんておかしいって話をしていただけです」
逆に駿来の方が丁寧になっている。変化についていけず悠が戸惑っていると、また勝手に話が進んでいく。
「なるほど。気付いたと？」
伽黄は楽しそうな笑みを浮かべる。

三十三頁

「最初からおかしいとは思ってましたよ。放浪の式術師のわりに着ている服がよすぎるし、それと貴方は峰海吏様が師匠だと言った。だとしたら一つしかない。史上初の最少年で五色の黒の君の位についた峰伽黄様。そうでしょう？」

駿来は溜息をついた。

（ふうん……ん？）

駿来の言葉を理解するのに時間が掛かった。だが、脳内で消化されると同時に悠は伽黄を指差す。

「えええええええ！」

と言う絶叫を聞いて、伽黄は眉を上げた。

「人を指さない」

何故か注意されてしまった。もっともだが、それよりも気になることが悠にはある。

「五色って確か式術師の一番偉い人でしょ？　なんで、桜鈴市にいたの？」

失礼だと思うが、田舎である桜鈴市にそんな式術師のトップがいるなんて悠には考えられなかった。

「人を捜してたんだよ。元黒の君、峰海吏をな。まぁ、本人を見つける前に、別の者を見つけたわけだが」

伽黄は溜息を付く。

「でも、なんで悠のことを助けようとしたんです？」

駿来は怪訝そうに伽黄を見る。

それもそうだ。用があって桜鈴市にいたのだから、悠などほっておいて自分の用を済ませばいい。別に伽黄が悠を助けるために動く必要はない。

「しょうがない。師匠の頼みだ」

「師匠？」

悠は首を傾げる。手紙を書いてもらったが、俊敬が書いてくれたのであって、海吏と言う人ではない。
「まさか、俊敬先生が海吏様のわけがない」
駿来は首を振った。
「いや。確かに、その俊敬先生ってのが、師匠だ。間違いない」
伽黄は断言する。
何をもって俊敬が海吏だと思っているのか知らないが、長年一緒にいたであろう伽黄がそうだと言うならそうなのかもしれない。そう悠は納得するが、駿来は違うらしい。
駿来は納得できないように首を振っている。
「まぁ、どっちでもいい。それにしてもよく知ってたな。俺が黒の君の位についたのはつい最近だ。そんなに直ぐに広まるとはなぁ」
伽黄は感心したように頷く。

三十四頁

「二十五歳で黒の君の地位についたなんて史上初ですから」
駿来の硬い声に伽黄は苦笑する。
「別にすごくないさ。直ぐに返上する」
伽黄の言葉に駿来が眉を上げた。
何故、駿来が不機嫌なのか悠はわからないが、折角就いた地位を直ぐ辞めるのはどう言うことなのだろう。悠なら何があっても辞めたりしないのに。
「黒の君の地位は特別でな。これまで一度も交代がなされていない。師匠はその昔、神の宝珠と融合してしまって、十五歳から歳を取らない体になったそうだ。だから、ずっと黒の君でいたんだが、突然、俺に地位を預けて行方不明になったんだ。あくまで俺は師匠の代理にすぎない。俺にはまだ五色になるほどの腕はないさ」
と言いつつ自分の実力がどの程度のものなのか理解している時点で、それなりの腕はあるのだろうと悠は思う。
「ん？　ところで神の宝珠って？」
「ああ。強力な力を持つ結晶体であり、神の一部だと言われているものだ。神の宝珠があれば国ひとつ簡単に落せるだろうと言われている。もっとも、神の宝珠は扱いが難しいとされていて結界くらいにしかまだ使えないそうだ。いずれば、軍事に使われるかもしれないが、今のところその心配はないだろうな」
伽黄は説明した。
ようは核と同じくらい危険な物と言うことなのだろう。多分。悠の知識が間違ってなければだが。
「結界って何？」
説明してくるのはいいのだが、わからないことが次々出てきて困る。
「結界ってのは、妖怪の侵入を防ぐ物だ。それぞれの省に張ってあ

る。大抵は強力な力を持つ妖怪にだけにしか作用しないんだが、ここ龍斗市だけは完全に妖怪が入れないように結界が張られている。その結果を張るのが巫女だ」

「巫女？」

ふっと浮かぶのは神社にいる巫女さんだ。

「そうだ。前の巫女が引退する十年前に巫女を選別して、新しい巫女がたつ。巫女に選ばれるものはこの国でもっとも強い霊力を持つ者だ。大抵、生まれる前から五歳までの間の子供が選ばれるな。この巫女は、男であろうとも女であろうとも関係はない」

いちよう頭に入れておくが、そんなことよりも悠には聞かなければいけないことがあった。

「私帰れるの？」

それが、悠の中でも一番気になる。

三十五頁

「お前の国を知っている者がいれば可能だ。だが、師匠が知らない以上駄目かもな」

真面目な顔をして伽黄の言葉を聞いて、悠はどう反応していいのか悩んだ。ショックを受けている部分と当たり前だと冷静にとる部分と二つにわかれるが、悠はもうわかっている。日本を知る人物はこの国、いや、この世界どこを探したっているはずがない。日本人でこの世界に連れて来られた者など自分くらいなものだ。

「巫女に頼るとしても、今は忙しいからな」

伽黄は悩むように言った。

「そう言えば、妖怪が門の前まで来ていたそうですね。もしかして、結界は弱まっているじゃないんですか？」

不意に駿来は真剣な表情をして尋ねた。

「いや。正確に言うとそうじゃない。でも、よくわかったな」

伽黄の言うところがわかってか、駿来は溜息をついた。

「それくらいわかりますよ。この辺りに妖怪が現れるのは大抵、巫女が代わる時だ。その時くらいしか、龍斗市には妖怪が現れないと聞きます。巫女が代わって十年も経ってないのに、結界に揺らぎがでるなんておかしいです」

駿来は真剣な表情をして伽黄を見た。

「詳しい説明はできない。お前たち二人は部外者だからな。悠のことだが、今は結界の件で忙しいから力を貸すことはできない。この件が終わるまでしばらく待っていてくれ。十分の間はこの屋敷で暮らすといい。ああ。駿来もな。気になるようなら滞在してくといい」

伽黄はそう言うと、鈴明に部屋を準備するように頼んだ。

鈴明は直ぐに頷いて部屋を出て行った。

妙なことになったと思いながら悠は駿来を見ると、駿来も微妙な顔をしている。でも、駿来は一度も帰るとは言わなかった。

三章　王様と剣士

1

そんなことがあった三日後、悠は龍斗市の街中を歩いていた。実は悠と駿来は待っている間に何かしようと話し合っていたのだ。そして、辿り着いた結末が働くこと。悠らしいと言えばそうだが、何より待っている間、何もしないで過ごすなんて考えられなかった。駿来もそうだ。駿来は悠とは違って働きに桜鈴市まで行ったのだ。このまま何もしないと言う選択肢は駿来の中にもない。一緒の店では働かなかったが、駿来にはずいぶん助けてもらった。そもそも悠が働く場所を得られたのも駿来のおかげだ。本当に駿来には感謝しっぱなしだ。

（なんか沢山もらってしまった）

袋の中にある肉まんを見て息をつく。昼食にと買った肉まんがあまったらしくそれを悠にくれたのだ。貰った以上食べるべきなのだろうが、今は微妙な時間だ。先ほど昼ご飯を食べたばかりなのだ。お腹は空いていない。

どうしようかと考えながら歩いていると、目の前から灰色の鎧に身を包んだ男達がこちらに向かって来るのが見えた。

（げっ）

悠は慌てて横道にそれた。伽黄に軍の人間には関わるなと注意されたのだ。その意見は駿来も同じらしく何度も頷いていた。なんでも、軍の人間は気が荒いとかなんとか。

それはともかく、軍の名前は龍峰軍（りゅうほうぐん）と言うそうだ。基本的にはこちらの世界と役割はかわらない。だが、話を聞いた感じではこちらの軍の方が、仕事は多そうだ。龍記国には警察が存在していないから、警察の役割もこなしているみたいだ。

悠が考え事をしながら歩いていると、何かにぶつかってよろめいた。何かっではなく、人に決まっている。人でなければもっと痛い目をみているはずだし、何より感触が壁とは違う。ぶつかってしまった人に支えられた悠は、はっと顔を上げた。

そこには以下にも見目麗しい端整な顔があった。むしろ、平凡な顔の自分には嫌味なくらいだ。いや。男の顔で悠が羨ましがるのはそもそも間違っている。悠は男ではなく女だ。

悠は男から離れる前に腕に抱えていた肉まんが無事であることを確認して、男から離れた。

「すみません」

と、ぶつかった事を謝罪した。直ぐに顔を上げた悠は、男の表情がどこか楽しげであり親しげだ。

（ん？）

悠には初めて会う男にそんな何度も会ったことがあるような、親密な表情をされるいわれがない。

三十七頁

「おや。こんな処で会うとは思わなかった」
男は嬉しそうに話し出す。
「……」
悠は黙ったまま男を見つめる。肩をこすくらい長い黒髪に、悠が見ても高級そうな服を着ている男の知り合いは悠にはいない。
「心配しなくても、皆に話さないよ。私も困るからね」
何か勘違いしたのか、男は茶目っ気たっぷりに笑う。
(ああ。これは……)
「休日くらいゆっくりと過ごしたいものだ。ふふ。無理とはわかっていてもね。そなたもそうだろう?」
悠が黙っていると勝手に話が進んでいる。
これは、間違いなくあれだ。伽黄もした人間違いだ。
「あの……」
自分から切り出したもののどう説明したらいいのか悩んだ。普通に人違いですっと言えばいい話だが、こうも喋りかけているのに気付かないのはちょっと変だ。そこまで瓜二つなのか、それともこの男が鈍感なだけなのか。
言葉が止まった悠を男は問い掛けるように見る。
悠は仕方なく口を開く。
「多分、ひ……」
人違いですと言う前に別の声が男に掛かる。
「へ……。遼賢(りょうけん)様。何故こちらに?」
酷く慌てた声を聞いて後ろを振り返ると、先ほど歩いていた龍峰軍の人達がいた。
何故かは知らないが、悠を見る目は酷く冷たい。まぁ、無視されないだけマシなのかも。いや。むしろ、この場合は無視してくれた方が逃げやすかったかもしれない。

（うー）
居心地がとっても悪い。今すぐに走って逃げたいところだが、駄目だろうなぁ。
「そんなに怒るものではないよ。心配しなくても直ぐ帰るしね。結花さん」
と、男は悠の肩に手を置く。
いや。ちょっと待て。誰だそれは。
「へ、いえ。遼賢様。まさか」
男の一人が何かに気付いたように悠を見つめる。
いや、だから人違いだって。と心の中で叫んでいるだけでは、間違われたまま彼らに連れて行かれそうな気がする。どうして誰も人違いだと気付かないのか、不思議だが急いで誤解を解かないと大変なことになりそうな気がして、悠は口を開く。

三十八頁

「お待ちください」

と、今度は悠の後ろから声が掛かった。

「鷲鳳(じゅほう)か。どうした？」

男は悠から手を離し、後ろを振り返る。

「失礼を」

との言葉と共に男が悠の前に現れた。男は黒髪を短くばっさりと切った真面目そうな顔をしている。服装は市井の者が着る物と変わらないから、今日は休みなのだろう。

「やはり、この方は結花様ではございません」

悠は男の言葉を聞いて内心でほっと息をついた。やっとだ。やっと話のわかる人が出て来てくれて、悠は心底安堵する。

「えー。でも、そっくりだよ。なにもかも」

「いえ。違います。失礼ですが、お名前をお聞かせくださいませんか？」

唯一、人違いをしなかった男に悠は名前を告げる。

「基棟悠です」

何もそんなに丁寧に聞かなくてもいいのにと思いながら、男を見ると、ほっとしたように男が息を吐いた。

「やはり、別人です。み……結花さまは、もう少しお声が高いので」

「なるほど。これは失礼したね。基棟悠君。私はもう戻るから、後は鷲鳳よろしくね」

ひらひらと手を振って、人違いをした男は龍峰軍の人達を帰って行った。

「……」

悠はぽかんと口を開けて去っていた男達を見つめる。

（何、今の？）
「申し訳ない。驚かれたでしょう」
男はそう言って苦笑する。
「い、いえ」
「俺は龍峰軍、鏡隊に属する者で、項鷲鳳（こうじゅほう）と申します。先ほどの方はその……」
鷲鳳は困ったように口を噤む。
鷲鳳の反応に悠は首を傾げる。高級そうな服を着ていた先ほどの男が只者でないことくらいは、悠にもわかる。だが、そんなに正体を明かすのが困る人なのだろうか。もしそうなら、もうこれ以上関わりたくない。

三十九頁

「あの、私と勘違いされた人は、そんなに私と似てるんですか？」
ちょっと気になって聞いてると、鷲鳳の反応は先ほど同じだ。
「それは……」
（こっちもかよ）
内心で突っ込んで、悠はこの質問をするのを諦めた。あまり、相手を困らせることではないし、それにお偉いさんとは関わり合いたくない。
「あの、じゃあ、私はこれで帰りますので」
悠はぺこりと頭を下げて、この場から立ち去ろうとしたが、鷲鳳に止められた。
「ああ。じゃあ、お宅まで送っていきます。迷惑を掛けてしまいましたからね」
にっこりと笑う顔は善意だろう。あれが上司で苦労すると思いながら悠は首を横に振った。
「いえ。大丈夫です」
「いえ。そういうわけにはいきません。遼賢様にも後を頼むと言われましたから」
と困ったように言われては悠では断りきれない。
「……わかりました」
悠は一つ溜息をついた。
「それで、どちらにお住まいなんですか？」
鷲鳳はにっこりと問い掛ける。

2

かくして、鷲鳳に送って貰うことになった悠は、伽黄の家にもどるために式術街を歩いていた。式術街は名の通り式術師達の住まい

が数多くある。階級が高いほど王宮の近くに住まいを構えることができると、悠は伽黄から聞いていた。
だが、五色である伽黄の住まいは式術街の端にあり、王宮からは遠い場所にある。なんでここにしたのかと伽黄に聞けば、師匠がここがいいと言ったからだと溜息混じり答えてくれた。悠にしてみればありがたいが、伽黄たちは大変じゃないかと思ったが。本人はあまり気にしている風ではなかったので、悠はその件を放置した。
「式術街に暮らしているってことは、悠のお父様が式術師なの？」
隣を行く鷲鳳がにっこりと尋ねた。
「いえ。お世話になっている人が式術師をしているんです」
と悠は鷲鳳に応じる。
始めはものすっごく丁重に扱われるので、悠は戸惑った。それを指摘すると、鷲鳳は苦笑して誤った。
『すみません。やはりそっくりだから』

四十頁

謝ることでもないのだが、鷲鳳は誠実な男――いや、真面目な男らしく、上司にそっくりな悠につい丁重に接してしまうらしい。

別にそのままでも何の問題もないが、やっぱり変な感じがする。悠は鷲鳳の上司じゃないのだがら、ものすっごくむず痒い。何とか悠の説得の上、鷲鳳の敬語が抜けたのは五分前のことだった。

「お世話って修行か何か？」

鷲鳳は驚いたように悠を見る。

龍記国では女性が式術師にはなれないそうだ。と言うより、女性では官僚にはなれない。女官にはなれるそうだが、国政には一切関われないと伽黄は言っていた。

「いえ。そうじゃなくて。私は神隠しに遭ってこの国に来たんです。それで、知り合った式術師の所でお世話になっているんです」

「へぇ。神隠しに遭った人に会うのはこれが初めてだよ」

「そうなんですか？」

「うん。俺は初めて見るよ。ああ。俺の一年上の先輩が会った事があるって言ってたかな」

鷲鳳はうんうんっと頷く。

駿来は神隠しがよく起こるような口ぶりだったが、実際にはそう頻繁には起こってないのかもしれない。

悠がそう考えていたところで、黒塗りの門が見えて来た。

「ああ。ここまでいいです」

悠がそう声を掛けると、鷲鳳は歩くのを止めて黒塗りの門を見て目を開いた。

「ここは……」

唖然とする鷲鳳を見て、悠は首を傾げる。

「えっと……」

「あれー。悠だ。もう仕事終わったの？」

のんびりとした声に引かれて後ろを振り向くと、駿来がにっこりと笑っていた。
「あれ？　駿来。早くない？」
確か、夕方になるまで帰って来ないと駿来が言って筈だ。だが、駿来は何事もなかったように目の前にいる。
「ああ。勘違いしてて。今日はお昼までだったんだ」
「なるほど」
悠が納得したように頷いた。
「って。この人は？」
駿来は鷲鳳の方を見て首を傾げる。
「私は項鷲鳳と申します。貴方は黒の方の親族でいらっしゃいますか？」

四十一頁

悠は鷲鳳の言葉に体を凍らせる。鷲鳳に一度も伽黄の事を言った覚えはないのに、何故知っているのか。
「なんで？」
「それは、この門が黒いからだよ」
驚く悠に駿来が説明する。
「いや。それじゃわかんないから」
「龍斗市では門の色を朱で統一しているのです」
と、鷲鳳が補足する。
「ええ！　それって大変なんじゃ？」
「門がある家は限られてるからね。例えば、官吏とか、貴族とか。つまり広い敷地を持つ金持ちだけってこと」
駿来はにこっと笑う。
「……」
どうも言葉に棘があるような気がする。
「その中で五色の方々だけは己の色を門に使用するのです。ええっと。そうですね。黒の方なら黒の色を門に使用すると言った感じです」
鷲鳳は一度咳をしてから再度補足する。
「ああ。だから、わかったんだ」
悠は一人納得する。
「ああ。そうだ。俺は李駿来。伽黄の親族じゃないよ。今は伽黄のところで泊めて貰ってるだけです」
駿来はぺこりと頭を下げた。
「ああ。いえ」
鷲鳳は慌ててお辞儀をする。
「そうだ。肉まん無事だったら、食べようよ」
悠は肉まんを駿来の前に差し出す。

「あれ。どうしたの？」
駿来は肉まんを指差す。
「貰ったんだ」
にこにしと悠は笑う。
「よかったねぇ。そうだ。鷲鳳さんもどうですか？」
お暇でしょうっと駿来は、鷲鳳に笑いかけた。
鷲鳳は一瞬、戸惑った表情を浮かべたが、一つ息をつくと微笑を浮かべた。
「では、お邪魔します。黒の方のお屋敷がどうなっているのか興味もありますから」

四十二頁

黒の君邸に戻った悠達は客間に移動し、肉まんを食しながら話しに花を咲かせていた。と言っても、悠はほとんど聞いているだけで、話をするのは駿来と鷲鳳だ。異世界の話をここでしていいのか、わからなかったので黙っていることにした。いや。話したとしてもきっと変に思われるだけだから、日本のことは言わないに限る。

そんな中で、鷲鳳は農家より官吏試験を受けて剣士なり、駿来と同じく次男でもあり、給料も実家に仕送りしているとの話を聞いた。

真面目だなっと思った悠よりも、すごく反応を示したのは駿来だった。同じ様な環境で育ってきた駿来と鷲鳳は気が合ったらしく、すごく楽しそうに話していた。妹にお土産を買っていこうと思うんだけど、どこがいいなど駿来が鷲鳳を質問攻めにしている。

ちょっと暇になった悠は、一人窓の外を見る。

雲ひとつない青空を見て、悠は故郷を思い出す。

（バイト、クビかなぁ）

無断で何日も休んだら流石にクビなるだろう。新しいバイトを探すのは、なかなか面倒だ。日本を思い出して、最初に気にするのがバイトだとはちょっと問題があるような気もする。

だが、数日いなくても友達はバイトやりすぎてぶっ倒れただけだろうと思って、きっとそこまで心配しない。実際、三回くらいそれが理由で学校を休んだ事があるから、尚のこと、またあれかで片付けられるだろう。いや。間違いなく。

でも、今回は違う展開になるかもしれない。灯葉が警察に捜索届けを出していたら、流石に心配するだろう。

（あっ！　だったらバイト、クビにならないかも）

そうならいい。何せ、新しいバイトを探すのは面倒臭いから。

（はぁ…。心配してるかな？）

あまり心配して欲しくないと思いつつも、心配して欲しいと思い

気持ちも確かに自分の中になって悠は嫌になる。不安になるまでもなく、灯葉は悠の事を待っていてくれるし、捜してくれるだろう。灯葉は優しい人だ。悠が知っている中では、誰よりも優しい人。

（そう言えば、話ってなんだろう）

家を出る時に言われた灯葉の言葉を思い出して、悠はむずむずする。

（あー。ものすっごく気になる）

「ねぇ。なんだか、楽しそうだね」

駿来に話しかけられて悠が駿来の方を見ると、何故か駿来と鷲鳳が笑っている。

「ん？　なに？」

悠は首を傾げる。

「悠って面白いねぇ」

にこにこと笑いながら駿来は言った。

四十三頁

「え。いや。だから、何が？」
「確かに」
くすりと鷲鳳が笑う。
「いやいや。何が？」
悠は焦りながら言う。考え事をしている間に、変な事をしてしまったのだろうか。いや、ない。絶対、笑いが発せするようなことは何一つだってしていないはずだ。
「そうだ。今度、来るときは何か持ってきますね」
鷲鳳は笑うのを止めて、駿来に話しかける。
「うん。ああ。でも、ここにいつまでいるかわからないんだ」
駿来は困ったように言った。
「ああ。そう言えば、悠は巫女様に会いたいんだっけ？」
鷲鳳は悠を見て尋ねた。
「んー。私は別に巫女……様じゃなくてもいいんだけど」
悠は唸りながら言う。別に繋げてくれる人さえいれば、誰だってかまないのだ。
（はぁ）
それが困難なことくらいはわかっている。流石に日本を知っている者はいないだろう。
（やっぱり神様、捜すしか）
「巫女様に会うのは困難かもしれません。確かに、黒の方が手を貸してくれるなら、会うにはあえるでしょうが。今は……」
鷲鳳は何かを堪えるように沈黙する。
悠と駿来は顔を見合わせた。
「そう言えば、伽黄もそんなことを言っていたような」
「言ってたよ。原因は教えてくれなかった」
悠と駿来は鷲鳳に聞かれないように声を潜めて話し合う。

「あー。あの。俺はもう帰らないと。夜から仕事が入ってるので、一度寝ておかないと」
鷲鳳は困ったように話した。
「あ。門まで送って行こうか？」
悠が尋ねると、鷲鳳は首を横に振った。
「いえ。大丈夫ですよ。道は覚えていますから」
「んー。じゃあ、また今度。次、会う時はいい店を紹介してね」
駿来はにこにこと笑いながら、ひらひらと手を振った。
「じゃあ、また今度」
と、悠は手を振る。
鷲鳳はにっこりと笑って、悠と駿来に挨拶をして部屋を出て行った。

四十四頁

3

その日の夜、伽黄は鷲鳳を伴って帰ってきた。
「って。なんで？」
悠は驚いて伽黄と鷲鳳をかぱっと口を開けて見つめる。
「うるさい。あまり騒ぐな」
伽黄は苛立ちを隠さずに言う。
（明らかに、初めて会った時よりも態度悪くなってる）
初めて会った時の爽やか青年風の対応は悠が全くの他人だったからだろう。きっと、この態度がド悪いのが素だ。
失礼なことを思いつつ、悠は鷲鳳の方に目を向ける。
鷲鳳は申し訳なさそうに、大きな袋を持っていた。
「それは？」
悠が指差すと、鷲鳳は苦笑いを浮かべる。
「話は中でする」
それだけ言うと、伽黄はさっさと客間に行ってしまった。
「はぁ？」
悠は声を上げるが、伽黄は取り合ってくれなかった。
（暴君め）
イライラしながら、後をついて客間に入る。
客間に入った悠は警戒しながら、椅子に座る。目の前にいる伽黄はやはり苛立っている。職場で何か嫌なことでもあったのだろうか。
「おい。どこで会った？」
剣呑な瞳で伽黄は悠に聞く。
「は？　誰と？」
悠は首を傾げた。確かに、今日は色んな人と会ったが、いきなり

どこで会ったと言われても困る。
「お待ちください。悠殿は知らないのです」
鷲鳳は慌てて割って入る。
「今日、お前とぶつかった相手は燕遼賢（えんりょうけん）と言って、龍記国皇帝陛下だ」
伽黄は溜息混じりに言った。
「……」
理解するのに数秒かかった。

四十五頁

「えええええええええええええ！」
理解して悠は絶叫する。
伽黄は煩そうに顔をしかめた。
「だって。王様でしょ。なんで街中にいんのよ！」
「趣味だ」
「趣味ですね」
悠の悲鳴に来た声に、伽黄と鷲鳳は揃って同じ事を言う。
「趣味って……」
「趣味だ」
戸惑う悠に伽黄はきっぱりと言い切った。
王様ともなれば、一人で街中を歩けるとは思えない。いや。できないだろう。報道番組で要人がボーディーガードに囲まれているのはよく見ることだ。
「うぇ……」
「はぁ。それよりも、陛下より明日の夕食を誘われた」
伽黄は溜息をついた。
「なんで？」
ただ、道でぶつかっただけだ。特に長話をしていたわけでもないし、人間違いをされただけだ。それがなんで食事に招かれる事になるのか理解できない。
「さぁな。陛下の考えることなんて俺が知ってるわけがないだろう」
「うっ。そうだけど……」
伽黄の言う事ももっともだが、どうにも納得しがない。
「それでだ。明日までに一通り、作法を教えるから覚えろ」
悠は上目遣いに伽黄を見る。
「辞退ってのは……」
「駄目だ」

伽黄はぎろりと悠を睨み付ける。
「あぁ。そう」
と、悠は溜息混じりに言う。
それから、悠は行きたくもない夕食会のために夜遅くまで、伽黄と鷲鳳に作法を叩き込まれる事になったのだった。
次の日、悠が起きたのはお昼過ぎだった。
お腹も空いてきたから起きたのだが、どうにもベッドから離れがたい。むしろ、そのまま寝過ごしてしまいたい。だが、時間になったら鈴明が起こしにくるだろうから、いい加減起きるべきだろうと思い悠はベッドから起き上がった。

四十六頁

「あー」
悠は悲愴な声を上げて机を見る。
机には、色とりどりの髪飾りやら首飾りが置かれている。これが通常の状態なら、綺麗だと思えたが、これからやってくる事を考えれば綺麗だなどとは思えない。いっそゴミ箱に捨ててやろうかとも思うが、これらの装飾品を弁償できるほどの金はない。
「ふふふふ」
机の装飾品を親の敵のように睨み付けて、悠は部屋から出た。
お腹が空いたから起きたのだが、これからの事を考えたら緊張で吐きそうだ。いくら、なんでも王様と食事するとなれば、悠でも緊張するのだ。
「あー」
このまま逃走したいくらいだが、流石に伽黄の元を離れて無事に日本へと帰れるとは思わない。ここは大人しく夕食会をやり過ごすしかないのだ。
「あ。悠様。おはようございます」
とてもお早くない時間だが、鈴明はにこやかに頭を下げる。
「ああ。おはよう」
悠は挨拶を返しながら、困ったように鈴明を見る。
本当は様付けを止めて欲しかったが、伽黄のお客である悠たちにそんな真似できないと全力で断られてしまった。様付け無しで呼んで欲しいが、鈴明の迷惑にならないようにと、それ以上は言わなかった。
「お昼ご飯をお持ちしますか？」
鈴明の質問に悠は少し悩む。
「んー。あんまりはいらないかな」
食欲はある。だが、気分が乗らないのだ。

「承知しました」
鈴明はそう答えて、ふっと微笑んだ。
「大丈夫ですよ。伽黄様もご一緒なさるそうですから、困った事があれば助けてくださるはずです」
「んー」
悠はそう唸りながら首を傾げる。
助けてくれるのは本当だろうし、そっちの心配はしていなかった。伽黄だって立場というものがあるのだから、悠がヘマをするのを黙って見過ごすわけがない。翌日、伽黄が連れてきた者が、作法も何もなってない阿呆だと噂されれば、困るのはそんな者を連れてきた伽黄だ。それはもう、全力で阻止するだろう。だが、いくらヘマをやらかした時のフォローしてくれる人がいたところで緊張するものはするのだ。
「では、今すぐ用意しますので、お部屋でお持ちください」

四十七頁

「では、今すぐ用意しますので、お部屋でお持ちください」
鈴明はそう言って、悠の前から離れて行く。
悠は一つ溜息を部屋へと戻っていった。
それから、悠は支度に取り掛かるまで部屋に引き篭もって過ごしていたのだった。

「いいか。俺の言う事をよく聞いて、とにかく黙ってろ」

と、怒鳴るのは厄介事を背負うことになった伽黄だ。
「わかってる。私は一切、発言しません」
悠はやる気なく頷く。
その姿を見て、伽黄は眉毛を吊り上げた。
色々と文句が言いたいのだろうが、それは悠も同じだ。頭は重いし、何より動きにくい。何故、こんな破目になったのかと昨日から考えている。ただ、日本に帰りたいだけなのにっと何度、心の中で叫んだことか。
「行くぞ」
伽黄は溜息を一つ落としてから、悠に声を掛けた。
悠は頷いて、伽黄の後を付いていく。
「お前のことは陛下に全て話してある。だから、あまり無茶な事はしないと思うが……」
そこで、伽黄は言葉を切る。
「ちょっと、不穏な切り方しないでよ」
悠は伽黄を睨み付ける。
「しょうがないだろう。あの方の考える事は、俺にはわからん。それと、王宮に入ったら、陛下の部屋に入るまで顔を上げるなよ」
伽黄は悠を見て念を押す。

「それよくわかんないだけど」
昨日も同じことを言われたが、顔を上げてはならないとは何の作法だ。そもそも、作法なのか。
「いいから。そうしてろ」
伽黄は渋面な表情を浮かべ、そう言ったきり口を噤んだ。
理不尽だと思っても、反論しないに限る。ついこの間、来たばかりの国の作法など、直ぐに会得できるわけがない。ここは大人しく、伽黄の言うことを聞いていた方が無難だ。
だんだんと近づいてくる王宮に吐き気を覚えながらも、悠は腹に力を入れる。
（ままよ）
なるようにしかならないのだから、気合を入れて悠はきっと王宮を睨み付けた。

四十八頁

4

案内された部屋は明らかに私的な目的で使われる部屋だ。いくら、建物の構造をよく知らないと言っても、こうも奥まで案内されればそう勘ぐるのも間違いではないはずだ。悠はぎゅっと眉間に皺を寄せる。伽黄が見ていれば、皺を寄せるなと突っ込まれるはずだ。だが、伽黄はその時、悠を見ていなかった。

どうぞと言われて、部屋に入った途端、伽黄が声を上げた。

「ちょっと待て。なんでお前がここいる？」

その声に悠が顔を上げると、そこにいたのは鷲鳳だった。今日は私服ではなく、軍で支給されている制服なのだろう。この前、見かけた軍の人と同じ格好だ。

「少し遅れるそうです」

鷲鳳は苦笑して、伽黄に答えた。

「それは構わないが。伝言役をお前に？」

伽黄は顔をしかめる。

「ええ。まぁ、お二人を知っているからと」

鷲鳳は悠に視線を向ける。

その顔が嫌に真剣で、悠は何かやってしまったかと不安になる。

「なるほどな」

伽黄は溜息を混じりに頷いた。

「どうぞ。お座りください。何なら先に食べ初めても良いとおっしゃっておりましたが」

鷲鳳は再び苦笑する。

「食べられる訳ないだろう」
と、答えて伽黄は椅子に座り込んだ。
「えーと」
「いいから、座ってろ」
悠が戸惑っていると、伽黄が不機嫌そうに言う。
悠は大人しく伽黄の隣に座った。にしても、伽黄は先ほどから自分の家と同じくらいの図々しさだ。あれだけ人に作法がどうとか言っていたくせに。不満が顔に出たわけじゃないのに、何故か伽黄が顔を見て溜息を落とす。
「とりあえず、大人しく待ってるんだな」
「いや。その必要はないよ」

四十九頁

悠が文句を言う前に、目の前にある屏風から声が掛かった。
「え……？」
悠が驚いて声を上げると、屏風の裏から龍記国皇帝陛下である燕遼賢が出てきた。
「ああ。不思議そうな顔をしているね。この後ろにも扉があるんだよ」
遼賢は市井にいた時と同じような見た目質素な格好をしていた。
王様となれば、もっと動きにくそうな格好をしていると思っていた悠は、ちょっぴり拍子抜けした。
だが、隣の伽黄の反応は違った。
「着替えていらしたんですか」
声には明らかに不快感が現れている。
（え……？）
「まぁ、そう怒ることはないだろう。今回は私的な食事会だよ。官の誰も知らないのだから、問題はないよ」
と笑う遼賢に、伽黄の目は冷たい。
「そう言う問題ではないかと思われますが。王とは如何なる時も王であるべきです。それと再三申し上げておりますが、市中をお一人でお歩きになるのはおやめください」
（え？）
相手は王様だと言うのに、伽黄は容赦ない。いや。言っている事は確かに間違ってないのだろうが、そんな嫌そうに言わないでも。
悠の反応を見て、遼賢はくすりと笑う。
「ほら、彼女が困ってるよ。少なくとも私に王としての態度を求めるなら、君も家臣としての態度をとったらどうかな？」
「取っていますよ。少なくとも師よりは」
伽黄はふいっと顔をそらした。

「まぁ、いいよ。君たちにそんなの期待してないから。それに、他の家臣と同じ様な態度で来られてもつまらないだけだからね」
遼賢はそう言って、伽黄の前に座った。
悠はどうしたらいいのかわからず、視線を漂われると鷲鳳がいなくなっている事に気がついた。悠が疑問を発するよりも前に、遼賢が口に出す。
「鷲鳳なら、見張りに外にいるよ。誰も近付けるなって言ってるからね」
にっこりと笑みを浮かべる遼賢を見て、悠は内心で溜息をついた。
（目敏い）
いや。それとも自分がそれだけわかりやすいのだろう。昨日の昼間も駿来と鷲鳳に面白いと言われてしまった事を思えばたぶんそうなのだろうと、悠は自分を納得させた。

五十頁

「それで、悠ちゃんは日本ってところから神隠しにあって、龍記国に来たんだって」
楽しげに言う遼賢を見て、悠は目を開く。
「な……。どうしてご存知なんですか？」
「報告を受けてるからね」
そう言って遼賢は、伽黄に視線を向けた。
「報告？」
いちいち報告するような事なのだろうか。神隠しとは。
「そうだ。この国の成り立ちを聞いた事はあるかな？」
「いえ。ないです」
それにそんなものに悠は興味がない。
「そうだよね。そうだ。食べ物が来る前にお茶でもどうぞ。まだ、何も口にしてないだろう」
遼賢が机の上にある湯呑みにお茶を注いで、悠に差し出す。
「はぁ？」
と、悠は大人しく湯飲みを受け取った。
（って。いいの？）
王様にそんな事させていいのかと一瞬思ったが、悠が何かを言う前にさっさと話を始めてしまう。
「その昔、双子の龍がこの地で暴れていたらしい。双子の龍は大層な力を持っていて、この大地を無に解す勢いで暴れていたそうだよ」
悠は黙って話を聞いていたが、どうも遼賢の目がお茶を呑めと言っているようで、一口お茶を飲んだ。
「そして、双子の弟の方が、何を思ったのか人に味方したんだ。龍記国第一皇帝陛下と霊力のとても高い一人の少女に自分達を封じる鏡を渡したんだよ。その鏡が龍斗市の結界を作っている神の宝珠と呼ばれているものだよ」

そう言って、遼賢が溜息をついた。
「双子の龍を封じる時に、この地は酷く傷付いたと言われている。それ故に、双子の子供は、この地を滅ぼそうとした双子の龍とかなさる事から、忌み嫌われているそうだよ」
遼賢が不意に困ったような表情を浮かべる。
「はぁ」
だから、それが何という感じだ。悠はこの国の人間ではないから、この国の考え方に文句を言うつもりはない。悠はただ、偶然この国に来てしまった、ただの旅人だ。あまり深く関わりあいになるつもりない。それに、慣れ親しんでも別れが寂しくなるだけだ。悠は絶対に日本に帰るのだから。
「私はあまり伝承には興味がないのだが、先代はそう思ってはいなかったようだ。それに、官吏の中には双子の子を災厄の象徴と思っているようだからね」

五十一頁

「長年、培ってきたものを変えるのには時間がかかります」
困ったように言う遼賢に、伽黄が暗く答えた。
「そうだね」
遼賢は苦笑する。
その遣り取りの中に何か含みがあるように感じたが、流石にそれを問いただす事はできそうになかった。その時の伽黄は明らかに問われる事を拒絶していたし、遼賢に聞いたところで答えてくれないだろう。
不意に遼賢は真剣な表情をして、悠を見た。
「だから、双子の子は高位の官にはなれないし、ましては巫女になどなれないのだよ」
そんな真剣な表情をしてこちらを見られても困る。遼賢の話は悠にはあまり関係ない。悠には血の繋がる家族などいないし、いたとしても日本にしかいないだろう。
（あれ？　なんか……）
眠いと感じる前に悠の意識は奥へと沈んでいく。
そのまま机に頭を直撃しそうになった悠の頭を支えたのは伽黄だ。伽黄は苦い表情をして、遼賢を見る。
「よく効くよね。流石だ」
遼賢はそう言ってから、部屋の外に控えていた鷲鳳に悠を連れて行くように命じた。
悠が鷲鳳に連れていたれるのを見てから、伽黄は口を開いた。
「どうするつもりですか？」
「どうもしないよ。下手をすれば、あれがまた不安定になる。でも、彼女が龍記国にいるのを他の者に知らせるわけにはいかない。君もわかっていることだ」
遼賢はそう言って溜息をつく。

「何故、戻ってきたのでしょう？」
「さて、私には答えようがないが。あれが彼女を呼んでいたのは確かのようだよ」
遼賢は肩を竦める。
「異界から人を呼び寄せるなど、人に出来るわけがありません」
「じゃあ、どこかの神様が手伝ったのかもね。困った神様だ。……よくよく問題を増やしてくれる」
最後にぽつりと零された言葉は伽黄の耳に届く前に霧散した。

四章　声の答え

1

「だから、私には関係ない」
との言葉と共に悠はがばっと起き上がった。
「……」
悠の視界に入ったのは、見た事もない実に高そうな机に、箪笥やら小物の数々だ。嫌に手触りがいい毛布に、ふかふかな布団。
「え？」
大分見慣れてきた伽黄に借りている部屋じゃあ勿論ない。それに、こんな贅沢品、間違っても伽黄の家にはない。
「なっ。何所ここ？」
と言う悠の疑問に答える者はなく、寂しく空気となって消えていく。
「いや。ちょっと待って。確か、王宮にいたんだから、ここって……」
暫く、考えて悠は絶叫する。
「えええええええ！」

つまりはあのまま寝てしまったわけで。
「ど、ど、ど、どうしよう」
などと言ったところで、誰もいないのだから悠の質問に答える声はなく、そのまま暫く悠は一人混乱していたのだった。
十分後、混乱が収まった悠はベッドから起き上がって、辺りを見回した。寝てしまったからこの部屋に運ばれて来たのだろうが。それにして変だ。先ほどから、あれだけ騒いでいるのに誰一人として、

様子を見に来ない。いくら、夜で人があまりいないとは言え、ここに悠がいるのは知っているはずだ。なら、起きたとわかって誰かしら様子を見に来るものだろう。

「はぁ……」

それに、伽黄はどこに行ったのだろうか。いくらなんでも悠を置いて帰ったりはしないだろうが。伽黄を探しに行くと言っても、王宮に来たのは今日が始めた。到底、探し出せるとは思えないし、勝手に王宮内を歩いては問題があるような気がする。だからと言って、待っているのは悠の性格には合わないのだ。

部屋の扉に向かった悠は、扉に手を掛けた。

五十三頁

「あれ？」
何度も扉を押すが開かない。逆なのかと思って扉を引いてみた。だが、扉はびくともしなかった。
「えーと。これって」
物凄く考えたくないが、これはもしかすると閉じ込められたのだろうか。
「なんで？」
非礼な事は何一つしてないと思う。いや。まぁ、王の前でまさかの睡眠に突入してしまったのだから、非礼となるのかもしれない。それにしては随分いい部屋で寝かされていたものだ。非礼とみなされたのなら、もっと対応が悪いはずだ。この部屋に閉じ込められただけなんて、変すぎる。
「んー？」
悠は腕を組んで、首を傾げた。
だが、いくら考えた所で何も浮かびやしない。
「どーしよ」
いっその事、朝まで寝てしまおうかとも思った。流石に、朝になったら誰が来るだろう。多分。
「はぁ……」
再度、悠が溜息をついた時、カタンと言う小さな音が外から聞こえてきた。悠が一人でなおかつ扉の前にいなかったら気付かなかっただろう。それほど小さな音だった。
「何？」
悠は音がした方に近づくと、それまで気が付かなかった窓が少し開いていた。
「……」

自分の観察力の無さに呆れつつ、窓を開け放つ。
少々高さはあるが、窓から出られないほどの高さではない。だが、勝手に抜け出してもいいものか。
「んー」

「こっちだ」

「は？」
不意に聞えた声に、悠は辺りを見回すが誰もいない。
それに、今の声はどこかで聞いた事があるような気がする。でも、どこで聞いたか全く思い出せない。
そんな声に従うのは癪だが、このままじっとしているよりはましかもしれない。それに、部屋の外に出れば誰か会えるだろうし。伽黄に会えるのが一番だが、そうふらふらしているとは思えない。

五十四頁

だから、伽黄に会えるか、会えないかは運次第だろう。
悠は服をめくり上げて窓を飛び降りた。着地した際にずっこけそうになったが、そのまま服を持って走り出しだ。どこに行くかは考えてなかった。なのに、体は勝手に動いて行く。まるで体が行き先を知っているみたいだ。
そのまま成り行きに任せて走っていると、塀に囲まれている屋敷を発見した。
「えーと……」
今までいた建物とは雰囲気が違う。先程まではいかにも権力者が集う豪華絢爛な造りであったが、建物は日本の神社と同じような静かで神秘的な趣がある。場所が場所でなければ、神殿だと素直に思っていただろう。
と、建物を発見したのは良い事だが、明らかに場違いの所に来てしまった気がする。王宮に来た時にこんな建物は見た事が無い。つまり、王様と会った部屋とは違う場所に辿り着いてしまったのだろう。別に王様と会った時の部屋を捜していたわけではないが。
それにしても、いくら夜だからと言って誰にも会わないとは変だ。普通、王宮を守護する兵士の一人や二人いるはずだが。
「んー」
きょろきょろと辺りを見回しても人っ子一人いない。王宮内なのだから、誰もいないなんて事はないだろうが、それにしても静か過ぎる。勝手に出歩くんじゃなかったと早くも後悔しつつ、発見した建物に足を向けた。
倉庫で無い限り誰がいるだろうし、もし倉庫だとしても兵士の一人か二人はいるだろう。伽黄の名前を出せばなんとかなるだろうと、安易な考えで悠は門の中を覗き込んだ。
近くで見てみると、やはり日本の神社に似ている。もしかしたら、

ここは項式寮の本部なのかもしれない。だとしたら、ある意味幸運だ。伽黄に会えるかもしれない。
だが、それは昼の話だ。いつまで仕事をしているのか知らないが、夕食時間からかなり経った今では誰もいないだろう。むしろ、悠は誰もいないから困っているのだ。残業してる人がいるかもとも思うが、果たしてそう上手くいくものか。
と、門の前で悩んでいた時だ。かなり小さな音だったが、悠にははっきりと耳に届いた。誰かが泣いている。それも聞き覚えのある声だ。
（えー）
素直に部屋に戻って大人しくしていると言う選択肢もある。だが、悠の足はゆっくりと声の方に向かって歩き出していた。
（もし、幽霊だったらどうすんの）
などと思っても、幽霊ではない事はよくわかっている。これは現実だ。別に妖怪が存在している世界なら、幽霊も存在していても可笑しくはない。

五十五頁

だが、この声は幽霊ではなく。
『お姉さま』
そう。
何故か懐かしさを感じさせる声でお姉さまと呼ぶあの声と同じなのだ。
声の主は独り木の側でしゃがみ込んでいる。腰近くある黒髪はゆるい三つ編みで束ねられていた。主に白と赤で作られている衣服は、日本の巫女と重なった。
ここ最近の悩みの種であった少女を悠は黙って見つめる。
声を掛けるべきか。
それとも黙ってこのまま来た道を戻るか。
とれる道は二つだ。
だが、どうにも体が動かない。動く事に躊躇しているのだ。この少女に話かければ、全てを知ることになる。夢は夢のまま終わらせた方がいい。夢が覚めれば、きっとあの場所へ戻れなくなる。灯葉が待つあの現実に。何故か、そう思えてしかたなかった。
不意に少女が顔を上げる。きっと人の気配を感じたのだろう。
この時、少女の顔を見ずにその場を去れば、何かが変わっただろうか。いや。結局、どんな道を選んでも、きっとここに辿り着く。それが、この世界に戻って来てしまった悠の運命。
その少女の涙流れる顔を見て、悠は驚愕する。
まるで鏡のように同じ顔をした人間がそこにいた。

2

悠が部屋を飛び出す少し前、伽黄と遼賢は夕食を取りながら話を続けていた。

「それで、探し人は見つかった？」
くすりと遼賢は笑う。
「見つかっていません。それにしても、何故いきなり居なくなったのか。今も不思議で仕方ありません」
伽黄はじろりと遼賢を睨み付ける。
家臣としてはあるまじき行為だが、今となっては直すのも面倒だ。遼賢はこう言った無礼な行動も笑って流すところがある。それを諌めるのは伽黄の役目ではないから、今も昔と変わらない態度をとる事にしていた。
「彼には彼の事情があるんだよ」
遼賢はそう言って、お酒を口に含む。
「師の事よりも、彼女をどうするおつもりですか？」
「先程も言ったけど、どうもしないよ」

五十六頁

遼賢の言葉を聞いて、伽黄は溜息を付く。
「私としては、もう暫くは黙っているつもりでした」
「ふうん。でも、いつまでも隠しておけるものではないよね」
「それは……そうですが」
伽黄は渋々頷いた。
「まぁ、確かに君の家に行く者はいないけれど、街中で高位の官に会ったら直ぐにばれてしまうよ。ならば、王宮に閉じ込めていた方が、まだ時間が稼げるよ」
遼賢の言葉に伽黄は溜息を付く。
「高位の官と言っても、巫女にお会いできるのは五色と巫女の世話をする女官、龍峰軍鏡隊の者だけです。その中では鏡隊だけです」
「そうだけどね。でも、街中を自由に歩かせている訳にはいかないよ。そのせいで、私と接触したのだから」
「それは、私の落ち度です。彼女に一切説明をしていませんでしたから。ですが……」
伽黄が続きを言う前に、ぱっと立ち上がった。
「馬鹿な！」
「ん？　どうした？」
遼賢は伽黄が慌てているのを見てそう尋ねた。
「結界が破れました。そう効力が強いものではありませんが。人がその辺り一帯に近付けなくするものです。悠のいる部屋に張ってあったものですが……」
「彼女が壊したの？」
「いえ。霊力はありますが、悠にはそれを使う術は持っていません。それに、この結界は悠には意味のないものですし」
悠のいる部屋に施されている結界はあくまで、部屋に人を近付けないようにするためのものだ。悠が部屋から出ないように拘束する

ものではない。
「じゃあ、誰かが接触したとか？」
「はい。もしくは神がとも考えられます」
伽黄は苦々しく頷いた。
「そうだったね。彼女は神隠しにあって戻ってきたんだ。全く、困ったものに好かれてしまったものだよ」
遼賢は溜息を付く。
「様子を見てきます」
伽黄はそう言って、慌てて部屋を出て行った。
「全く、困ったね」
と、残された遼賢は深く溜息を付いたのだった。

五十七頁

かくして、無事部屋を出た悠は、自分と全く同じ顔を見て戸惑っていた。しかも、その同じ顔の少女がやたらとにこにこしているのには、本当に戸惑う。

「えーと」

悠が尋ねる前に、少女が突然頭を下げた。

「ごめんさない」

「え？」

先程と言い、今と言い、本当に少女の行動は突然だ。少女が悠の存在に気がついて直ぐにお姉さまと言う声と共に抱きついてきたのだ。きっと硬直していなかったら、突き飛ばしていたところだろう。

「行き成りで驚かせてしまいましたでしょう？　わたくしは結花（ゆか）と申します」

結花はお辞儀をした。

（ん？）

どうもその名前には聞き覚えがあった。そう。誰かが言っていたような気が。

「皆から、巫女様などと呼ばれていますが」

と、結花は目を伏せた。

「ああ！」

確か、遼賢が呼んでいたのだ。道理でみんな間違える筈だ。髪型が違うだけで顔が瓜二つなのだから。にしても、似すぎている。それに、なんだってこの少女は悠をお姉さまと呼ぶのだろうか。悠が知る限り妹など存在していないはずだ。

「あの？」

急に声を上げた悠を結花はきょとんと見る。

「あー。その……」

悠は言葉につまっていると、地面を踏みしめる音がした。ぱっと

後ろを振り返ると、驚きの表情を浮かべる鷲鳳が立っていた。
「悠？　どうしてここに？」
「えーと。歩いていたら、ここにたどり着いて」
との言葉に、鷲鳳は困惑の表情を浮かべる。
「そんなはずは」
「ん？」
鷲鳳の反応に悠は首を傾げる。
「ここには結界が張ってあるのですわ。お姉さま」
「結界？」
そんな馬鹿なとも思うが、妖怪やら神様が実際に存在しているような世界ではそんな事もあるのだろうと、悠は自分を納得させた。

五十八頁

「はい。通常なら、その結果に惑わされて全く別の場所に出てしまうのです」
と、続けて結花が説明してくれた。
「ふうん。ん？　じゃあ、鷲鳳は迷わないの？」
悠は鷲鳳を見る。
「ええ。ここに立ち入りを許可されている者にはきかないのです」
鷲鳳はそう言ってから、辺りを見回した。
「とりあえず中に入りましょう。ここにいては、鏡隊の者に会ってしまいますから」
鷲鳳はそう言って悠と結花を促した。
建物の中はいたって普通で、王宮の一角だと忘れてしまいそうになるほど静かだ。
この建物に暮らす者は、巫女の世話をする女官が六名と、巫女の警護をする鏡隊の者が辺りを巡回するだけだと言う。ここ巫女の住まいである建物は鏡殿と呼ばれ、訪れるのは五色と王のみ。それも、年に五度訪れれば良い方だとの話だ。
「ってことは。私ってここにいたら不味いんじゃ」
これまでの話を聞いてそう不安になるものの、勝手に部屋から出て王宮内を歩き回っていたのだから今更だ。
「そうですね。ですが、どこに居てもそれは変わらないかと」
何故か、鷲鳳は扉の側に立って控えている。
座らないのと声を掛けるべきか一瞬迷った。だが、ここの主である結花が何も言わないのだから、悠はその事については黙っている事にした。
「それで、お姉さまはどうやってこの国に来られたのです？」
きらきらと瞳を輝かせて結花は悠を見る。
「えーと。神隠しに会って」

姉と呼ばれる事に戸惑いながら悠は、とりあえず質問に答えた。
「まぁ。それでは神様がわたくしの願いを叶えてくださったのですね」
とても嬉しそうに結花は笑う。
悠的には全く嬉しくないのだが、そんな事より疑問を解決するのを先にすべきだろうと考えた。
「それで、どうしてわたしの事を姉って呼ぶ……呼ぶんですか？」
そう悠が尋ねると、結花は首を傾げた。
「陛下からは何も聞いていないのですか？」
「何も聞いてないです」
悠が聞いたのは国の成り立ちとやらだけだ。と言うか、なんで遼賢に呼ばれていた事を知っているのだろう。まぁ、鷲鳳がここにいるから、鷲鳳が教えたのだろうと思い特に気にしなかった。

五十九頁

「そうなのですか。巫女が前の巫女に選ばれる事はご存知ですか？」
「ああ。はい。知ってます」
巫女が引退する十年前に次の巫女を捜すのだと、伽黄から聞いた事がある。
「十七年前の事ですわ。時期巫女が選ばれて、巫女を宿す母の腹からこの世に生まれ落ちた赤子は二人いたのです」
結花はふっと悲しい表情を浮かべた。
「……」
なんだが、嫌な予感がすると悠は顔をしかめる。
「双子の巫女は禁忌なのです。なので、その時の陛下と五色が霊力の強いわたくしの方を巫女にすえたのです」
結花は溜息を落とした。
「陛下は五色にお姉さまの殺害をお命じになられたのです。ですが、当時の紫の君である李灯葉様が、お姉さまを連れて国を出られたそうです」
結花の言葉に、悠は押し黙った。

李灯葉？

それは、灯葉のペンネームだ。長年暮らしている灯葉の顔が浮かぶ。いつも笑顔で優しい大らかな人は家を出た時何と言っていた？
『悠さんの疑問に答えてあげることは出来ませんが、一つだけ。どんな選択をしたとしても、私はここで悠さんの帰りを待っています』
といつもの笑顔で。
『悠さん。帰って来たら、お話があります』
と悲しげ顔で。
話とまさかこの事だったのではないか。自分が昔五色の紫の君で

あった事、悠自身の事。それを打ち明けるつもりだったのか。
いや。だが、結花の事を鵜呑みにしていいものなのか。ただの偶然と言う可能性だってまだあるのだ。名前が同じ、顔が似ているなどよくある話である。
でも、結花の話を否定する根拠も何もないのだ。
しかし、だったら灯葉は……。

ガタンっと大きな音で扉が開いた。

思考を停止した悠はゆっくりと扉を振り返ると、何故か慌てた様子の伽黄が立っていた。

六十頁

3

部屋に入って来た伽黄は、悠を見つけると一つ溜息を付いてから、悠の前で立ち止まった。
「この馬鹿！」
と言って、伽黄は悠の頭を叩いた。
「ちょっ……」
悠は頭を押さえて伽黄を睨みつけた。
「なんで、部屋で大人しくしてなかった」
伽黄は怒鳴り声を上げる。
「そんな事言われましても」
ふいっと悠は伽黄から目をそむけた。ここで素直に反論できないのは、勝手に歩いていた事実があるからだ。
「しかも、鏡殿に立ち入ってるだと。ここは決められた者しか入ってはならない禁止区だぞ。勝手に立ち入ったとわかれば、即座に監獄いきだ。わかってるのか？」
「えー。そんな事聞いたことないし」
悠は伽黄から視線をそらして言った。
「そう言う問題じゃない。勝手にうろつくなと言ってるんだ」
伽黄はちらりと結花を見てから溜息を付く。
「話は聞いただろう。だったら、今の自分の立場はわかってるはずだ。勝手にうろつくんじゃない」
伽黄は苦虫を噛み潰したような表情をする。
「わかんない」
「あほ。とにかく、ここから出て、部屋で大人しくしてるんだ。部屋に着いたらちゃんと説明してやるから」

伽黄は呆れたように溜息を付いた。
「うん。わかった」
ここで拒否したら猫みたく運ばれそうな気がしたので、悠は素直に頷いた。
「待って。なら、ここに居ればいいではありませんか」
結花は慌てて言い募る。
「いえ。駄目です。陛下の許可も出ていませんし、他の五色に存在を知らせるわけにはいきませんから」
伽黄はきっぱりと言い放つ。
誰であろうとも、伽黄の態度は変わらないのだと妙な処で納得しつつ悠は大人しく立ち上がった。

六十一頁

「彼女と話がしたいのであれば、鷲鳳に申してください。それから手配しますから」
伽黄は納得していない結花に対してそれだけ告げて、悠の腕を掴んで歩き出した。
悠には逃げるつもりは毛頭無かったが、何故か伽黄は寝ていた部屋に戻るまで腕を離さなかった。

「ええ！」

鷲鳳と顔を突きつけて話していた駿来は驚いた声を上げた。
悠と伽黄が出かけた次の日の朝早く、何故か鷲鳳が尋ねてきたのだ。二人ともまだ帰っていないから、鷲鳳の訪問には驚きつつも、駿来は鷲鳳と話をした。そこで、聞いたのは悠が巫女と双子の姉妹だという事だ。
「でも……」
と言ったきり、言葉が浮かばない。
「いや。確かに。十七年前に元紫の君の李灯葉が双子の片割れを連れて逃げたのは王宮では有名な話だよ」
自分に言い聞かせるように鷲鳳は言った。
「それで、悠は？」
「陛下が用意された部屋に。でも、これからどうするのかは決めてない」
「決めてない？　それってどういう事？」
駿来は顔をしかめる。
「物騒な事にはしないって言っているけど。巫女が不安定だから」
鷲鳳はよく分からないと首を振る。
「その不安定ってのがよく分からないんだけど」

結界が弱くなっているとか、どうとかよく耳にするが、巫女に何が起こっているのかは市井にいる駿来には分からない事だ。
「んー。それは、説明するのが難しいんだけど。傍目に見て巫女は健康そのもので、異常は特にない。毎朝の儀式も欠かさず行っている。でも、結界は弱っている」
「つまり？」
「心の問題。自信をないって言えばいいのかなぁ」
鷲鳳は首を傾げた。
「自信がない？　力とか」
同じく駿来も首を傾げる。
「それもあるのか。でも、そうじゃないと思うけど。んー。こればっかりは本人に聞いてみないとわからない」
鷲鳳は肩をすくめた。

六十二頁

「まぁねぇ」
駿来は素直に頷いた。身体的問題ではないのなら、他人にはよくわからないのは仕方ない事だ。
「でも、まぁ。俺としてはあれっで悩んで貰ってくれると少し気が楽なんだけど」
鷲鳳は苦笑する。
「あれ？」
まだ何かあるのかと駿来は首を傾げた。
「あ。いや。こればっかりは本人同士の問題だから」
鷲鳳は慌てて手を振った。
「ふうん。そう言えば、巫女の願いを叶えて、神様が悠をこっちに連れてきたんだよね？」
鷲鳳の言葉でわかった気もするが、ここは追求しないでおくべきだろうと、駿来は話を変えた。
「多分。そうだと。でも、本当のところはちょっと」
鷲鳳は困ったように言う。
確かに、それは今のところはっきりはしないだろう。それこそ、神様聞かなくては。
「巫女が姉の存在を知ったのは最近の事なんだ。見知らぬ姉に何を願っていたのか」
鷲鳳はそう言って溜息を付く。
「巫女の事はいいんだけど。悠はちょっと心配かな」
鷲鳳は心配そうに言った。
「心配って？」
駿来は不安そうに鷲鳳を見る。悠の状況からあまり楽観視できないだろう。いくら、皇帝陛下が当時とは代わったとは言え、当時と同じ決定が下される可能性だってあるのだ。

「うん。話を聞いて、動揺しているみたいだったし。それに、何か考えこんでいるみたいだった」
「……」
鷲鳳が心配しているのは命云々ではなく心のようだ。
「あのさ。お願いがあるんだけど」
駿来はじっと鷲鳳を見る。
「ものによりますよね」
鷲鳳は警戒気味に答えた。
「悠のところに連れてって」
にっこりと笑って駿来は言った。

六十三頁

「はぁ……？　えええええ。無理です。無理ですから」
駿来はかなり渋る鷲鳳を何とか説き伏せて、王宮に潜入する準備を始めたのであった。
それからの行動は迅速で、鷲鳳は一度家に戻り、軍服を持って伽黄の家に戻って来た。
「ばれてないか。ものすごく心配だ」
鷲鳳は軍服を広げてはぁっと溜息を付く。
「まぁ。大丈夫だよ」
にこにこと駿来は笑った。
鷲鳳は駿来を睨み付けたが、反論はしたりせずに話を進める。
「とにかく。本来なら、駿来が入る事は出来ない場所であることをしっかりと頭に入れて。それと、ばれたら死だって事も」
鷲鳳は真剣な表情をして言う。
「わかってる。でも、俺はいいけど。俺を中に入れたってわかれば、鷲鳳も困るだろ。ここからは見てみぬふりしてもいいよ」
駿来がそう言うと、鷲鳳はふっと微笑を浮かべた。
「今更だって。それに、悠の事は心配だし」
「そっか……」
と、駿来は頷いた。
「あまり目立ちたくないから、なるべく人の出入りが多い時に王宮に入る」
「でも、普通は逆な気がするけど」
人があまり多いと、多くの人に見られてしまうような気がする。
「人が多いほうがいいんだよ。なるべくなら人に紛れて入った方がいい。王宮に入る者は限られているし、軍の制服を着ている者をいちいち止めたりはしないよ。軍の制服は支給品で、一般では扱われてないから」

鷲鳳は大丈夫とは言わなかった。
まぁ、確かにどんな対策を練ろうとも大丈夫だと大見得きれる馬鹿はいないだろう。国の権力者達が集まる中心地に無事にすむなんて到底思えない。
「でもさぁ。なんかわくわくするよね」
駿来は不謹慎とも思いつつ、きらきらと輝く笑顔で言った。
「いや。全く」
鷲鳳はばっさりと切り捨てて、準備を続行する。
紆余曲折ありながら、駿来は何故か目を輝かせて、鷲鳳は緊張しながらも悠のいる部屋まで辿り着いたのだ。結局ここまで辿り着くまでに一時間以上かかってしまった。鷲鳳が慎重に行動していた事もあるが、どうも王宮の人達がざわついている感じがしたのだ。ともかく、鷲鳳を部屋の外で待たせて、駿来は扉へと手をかけた。

六十四頁

4

部屋で一人考え込んでいた時に、突如現れた駿来を見て、悠は驚きの声を上げる。
「なんで？」
「来ちゃった」
駿来は照れたように笑った。
「いや。来ちゃったじゃないから」
悠はそう突っ込みつつ、じとっと駿来を見つめる。
「幻とかじゃないよね？」
「本物だよ。勿論」
と、駿来は真面目な顔をして答えた。
「でも、一般人はそうそうはいれないんじゃあ」
「だから、潜入したんだ」
駿来はきらきらと輝く笑顔で言った。
「……」
色々と言いたい事はあるが、ひとまず置いといて用件を聞く事にした。それにしても、ばれたら只では済まされないであろう事が容易に想像できるのに、何故こんなにもきらきら笑顔で話すのだろうか。悠は疑問に思いつつも口には出さなかった。
「それで、どうしてこんなところまで来たの？」
「悠に会いに来たんだよ」
駿来は頷いた。
「私に？　なんで？」
「どうしてるかなって思って」
駿来は相変わらずの笑顔で答えた。

そんな理由でこんな所まで来たのかと呆れた。
「そんな理由でこんな所に来ないでよ。危ないでしょうが？」
「そうかなぁ。そんな事ないと思うよ」
駿来は首を傾げる。
どれだけ楽観主義者なんだと悠は溜息をつく。
「俺の事はいいとして。悠の事だよ」
駿来は真剣な表情をして悠を見つめる。
「私？」
「悠はしたい事があるんじゃないの？」

六十五頁

「あるけど。そう簡単に帰れるわけじゃないし」
それに今は帰る帰れないと言っている場合じゃない。ここ最近、弱り続けている結界の対処に忙しいのと、巫女の様子が可笑しいとの事で、悠にだけかまけている訳にもいかないのだ。だから、直ぐに悠の処遇が決まる事はないのだと伽黄から聞いた。前とは違う結果になるだろうと伽黄は言っていたがどうなる事やら。
「俺はね。本当は式術師になりたかったんだ」
「え？」
行き成りの告白に悠は戸惑った。
「一度、試験を受けに行った事があるんだけど、力が弱いって落っこちたんだ。試験ってタダじゃないから、次ってのは考えた事がなかった。ほら、俺の家お金持ちじゃないだろう。まだ小さいのだっているからあんまり俺にお金かけるわけにはいかないから」
駿来はそう言って苦笑する。
悠は黙って聞いていたここで口を出すのは違う気がして。
「でもねぇ。中々諦めがつかないもので、俊敬先生に会ってから教えてもらってたんだ。試験受けないのにね」
「受けないの？」
驚いて言うと、駿来はくすりと笑う。
「うん。お金ないし」
試験に受けるのにどれだけ掛かるんだと悠は顔をしかめる。
「まぁ、しょうがないだけど。結構、力弱いって事で落ち込んだから」
（トラウマ。トラウマなの）
今の今まで尾を引くほどのショックを受けたのかと悠はじっと駿来を見る。
「それでねぇ。俺は、この事でいまだに悩んだりするんだけど。悠

はさぁ。帰らなくてもいいの」
と、駿来は悠に笑いかけた。
「でも……」
帰ると言っても頼みの巫女は今それど頃ではないし、何より勝手に動いていいのか。
「待ってる人がいるんじゃないの？」
「それは……」
「聞きたい事があるんじゃないの？」
聞きたい事なら沢山ある。十七年前、悠の人生は変わった。だが、それは灯葉もだ。今まであった全てを捨てて一人の子供を連れて逃げた彼には今何が残っているのか。悠は確かに色々合ったが、幸せな日々を送っていた。果たして彼は幸せだったのだろうか。

六十六頁

「聞きたい事があるなら、聞くべきだよ。待っている人達の所に帰りたいなら帰るべきだよ」
「でも……」
「聞くのが怖い？　知るのが怖い？　変わる事が？」
悠は黙って駿来の言葉を聞いていた。
「でもさぁ。悠は怖いからって立ち止まったりしないよね。寧ろ、自ら突っ込んで行く子だと思うけど」
確かに、駿来の言うとおり考えるよりも先に行動するタイプの人間だと思っているが。
「全てを諦めてしまうの？　彼は全てをかけて君を連れ出してくれなのに？」
「それは……悪いと思ってけるけど」
「違うよ。悠。悪いなんて思わなくていい」
駿来の言葉に悠は首を傾げる。
「少なくとも謝って欲しくはないと思うな」
駿来はくすりと笑う。
「そんな事のために悠を連れて逃げたんじゃないと思うよ」
悠は息を吐いた。
「結局、駿来は私を帰したいんだ」
「だって、帰りたいんでしょ」
駿来はきょとんとした顔で悠を見る。
そう。駿来の言うとおり悠は帰りたいのだ。いくら考えた所で、灯葉が幸せかそうでないかは悠には分からない事だ。幸せも不幸も決めるのはその人自身。どう足掻いた所で悠には分かるはずもない。ただ一つ分かるのは、悠は不幸ではなかったと言うだけの話だ。それに灯葉は言ったのだ。待っていると。ならば帰らなくては、悠の帰りを待ってくれる人のもとへ。

「確か、巫女のお願いを神様が聞いてくれなんだよね。だったら、頼めば悠のお願いも聞いてくれるよ。きっと」
駿来は微笑んだ。
「でも、どうやって神様に会うの？」
神と言う存在に会った事があると言っている人は聞いた事がない。まぁ、声を聞いたとかならあるが。
「巫女様なら知ってるんじゃない。ほら神様のお願いしていた訳だから」
駿来はさも簡単な事だとばかりに言う。
「その巫女様って人には簡単に会えないんだって」
「忍び込んじゃえばいいじゃん」
駿来の言葉に悠は手を振る。
「いや。ばれるって」

六十七頁

「まだ、ばれてないよ」
と言う駿来は王宮に侵入している最中だ。
「……って。どうすんのよ。ばれたら！」
悠は、はっと声を上げる。
「うーん。そうだな。黒の君伽黄さまに庇って貰うよ」
駿来は気軽に笑う。
「いや。いくら伽黄でも庇いきれないでしょ」
無理むりっと悠は手を振る。
「そんな事ないよ。調べれば、俺がどこに滞在していたか分かるし。ばれたら困るのは伽黄もだよ。きっと必死になって庇うって」
駿来の笑顔に一瞬黒さを見た悠は視線をそらした。
「でも、あんまり無茶は出来ないよね」
ふむっと考えるように駿来は頷いた。
「今更じゃないそれ」
ここまで進入しておいて何を言うのかと悠がぼそりと呟くと、駿来はそうだねっと笑った。
「すいません」
と、鷲鳳が顔を出した。
「って。鷲鳳も潜入したの？」
「いや。俺はここで働いてるから」
鷲鳳は苦笑する。
「ああ。そうだった」
「それで、何かあったの？」
駿来は首を傾げた。
「どうも様子が変で、調べてくるからしばらくここで大人しくしていて」
と言って鷲鳳は走り去ってしまった。

「どうする？」
駿来は真剣に悠を見る。
「どうするって。行くの。まぁ、行けると思うけど」
悠は悩みながら言った。このままここ居ても現状は何も変わらないのは分かりきったことだが、だからと言って王宮をぷらぷらと歩いていいものか。
「でも、皆が気を取られているうちに行動した方が安全だよ」
駿来の言うことは一理ある。
「んー。しょうがない。行ってみよう」
悠は駿来に押される形で合意したのだった。

五章　鏡の巫女

1

こそこそと行動しながら悠と駿来は草陰に隠れながら通りを睨んでいた。

「なんか、慌ただしい」

鷲鳳が言っていたとおり、何か王宮内で問題が起きているのかもしれない。

「うーん」

駿来は通りを慌ただしく駆ける龍峰軍を睨みつけている。

鏡殿に向かい進んでいたのだが、昼間だけあって警備の数が昼の倍あるのと、何か起こっているのが合わさって人の動きが激しく移動がし辛かった。

「戻る？」

悠は駿来にそう言った。今、このまま鏡殿に向かうにはリスクが多すぎる。ならば、事が収まるまで大人しくしている方がいい。

「んー。でも、戻るのも大変そうだよ」

駿来は来た道の方を見ながら唸り声を上げる。

「俺は大人しくしていろっと言ったはずだが？」

怒りのあまり震える声を聞いて、悠はゆっくりと後ろを振り返る。背後にどす黒いオーラを従えた伽黄が悠と駿来を睨み付けていた。

「あっ。どうも」

駿来はぺこっと頭を下げた。

（どうもって）

怒り心頭の人物に対してその対応はないだろうと呆れながら、伽

黄を見るとこめかみがぴくりと動いたのを悠ははっきりと見た。
「お前は……」
と言いかけて伽黄は溜息を付く。
「とにかく、直ぐに部屋に戻るんだ」
今はそれど頃じゃないのか、伽黄は直ぐに冷静さを取り戻して言った。
「何か起きてるの？」
悠がそう尋ねると、伽黄は溜息を付いた。
「どうも何者かが侵入しているらしい」

六十九頁

との伽黄の言葉を聞いて悠はゆっくり駿来を見る。
「俺？」
駿来は自らを指差して首を傾げた。
「お前じゃない。侵入しているのは人じゃなくてだな。妖怪だ」
伽黄は辺りに視線を泳がせる。
「妖怪？」
素っ頓狂な声を上げた悠の隣では、駿来が真面目な表情を浮かべて口を開いた。
「普通、妖怪がこんな所まで入って来れないんじゃないんですか？」
「普通はな……」
伽黄は何か悩んでいるのか、ふっと黙り込んだ。
悠は駿来の服を引っ張る。
「ねぇ。今のうちに戻ったほうがいいんじゃい。巫女には一人で会いにいくからさぁ」
その言葉を聞いて駿来は微笑んだ。
「心配してくれるんだ。でも、大丈夫だよ。多分」
「いや。多分って」
っと突っ込んだ時、伽黄によって頭を叩かれた。
「声がでかい」
伽黄は周囲に視線を走らせて、直ぐに悠と駿来の方に視線を合わせる。
「しょうがない。ちょっとついて来い」
との言葉に悠と駿来は顔を見合わせて頷き、直ぐに伽黄の後に付いて走り出した。
伽黄が向かった部屋は掃除が一切されていないらしく埃っぽく、本来なら棚にある書物は無造作に床に広がっていた。それに加え、窓には黒いカーテンが張り付いている。王宮の一角とは思えないく

らいの酷い荒れようだ。
「えー。入りたくないんですけど」
と言う悠の言葉は伽黄によって無視された。
伽黄は扉を閉めると、箪笥と見られる木の物体から服を引っ張り出す。
「いいか。お前はこれから俺の仕事を手伝ってもらう」
伽黄は駿来に服を差し出す。
駿来は服と伽黄を交互に見つめる。
「俺が？」
「そうだ。暇だろう。それに俺の弟子って扱いなら、試験に受かっていなくても王宮に出入りできるからだ」
「はぁ……」
駿来は困ったように息を吐く。

七十頁

「つっても入れるのは項式寮内だけだ。他の出入りは基本的には禁止されている。今は緊急時だからな。今回は例外として罰せられる事はない」
「ああ。なるほど。これなら、俺がふらふらしていても問題ないって事ですね」
駿来は納得したように頷いた。
「そうだ。だから、これに着替えろ。昔、俺が着ていたものだから問題はないだろう」
伽黄はそう言って駿来に服を渡す。
「ん？　なんで伽黄の服がこのごみ溜めみたないな部屋に置いてあんのよ」
悠が疑問に思って尋ねると、伽黄は溜息を付いた。
「ここは項式寮内の黒の君の部屋だ」
「って。ここって項式寮なの？」
悠は驚きの声を上げた。
「そうだ。そもそも鏡殿は項式寮の奥にあるんだ。そして、五色の部屋は項式寮の奥にあるんだよ」
「近いって事？」
「そうだ。だから、お前はさっさと着替えろ」
伽黄は駿来に注意した。
「えーと」
との駿来の言葉に悠は駿来に背を向けた。
「ところで、なんで弟子は特別なわけ？」
駿来が着替えている間悠は、とりあえず疑問に思った事を伽黄に尋ねた。
「弟子でも王宮入りできるのは五色の弟子だけだ。と言うより、弟子をとるのは五色だけとも言えるな」

伽黄の言葉に、悠は首を傾げた。
「は？」
「師弟関係はあまり結ばないんだよ」
伽黄は肩をすくめた。
「はぁ？　何で」
「知らん。派閥とかは勿論あるがな」
伽黄はそう言って目をそらす。
よく分からないが、弟子はあまりとらないのが項式寮の流儀なのだろうと悠は深く考えない事にした。
「さて。準備も終わったな？」
伽黄は駿来に確認を取る。
「ええ。はい。大丈夫です」

七十一頁

との駿来の声に悠は駿来の方を振り返った。弟子と言うからには何か特別な衣装なのかと思えば、ごく普通の服装だ。普段、駿来が着ている物と代わりはない。少しがっかりしながらも今は服装どころではないと頭を切り替える。

「で、どうするんですか？」

駿来の疑問は、悠も同じなので黙って頷いた。

「決まってるだろ。妖怪を封じるんだよ」

伽黄は溜息混じりに言った。

「はぁ？　無理」

悠は首を横に振った。いくらなんでも、無理だ。妖怪など存在しない世界からやってきて悠にそんな芸当手伝える訳がない。

「でも、妖怪を封じるくらいなら、わざわざ黒の君が出て行かなくてもいいんじゃないんですか？」

駿来は首を傾げた。

すっかりではないが、伽黄が黒の君だと忘れていた悠は、はっと顔を上げる。いくら王宮で妖怪が暴れているからと言っても、項式寮のトップの人間がほいほい前線に出てくるなどありえない話だ。

「まぁ、普通は俺がいかなくてもいいんだが……そうだな。どうも、何者か動いているような気がするんだ」

「誰が？」

「知るか。それを調べるんだろうが」

と、悠の疑問は伽黄に一瞬される。

「でも、そうなると狙いはなんでしょうか？」

「心当たりが多すぎるな」

伽黄は溜息を付く。

「こう言う場合は王様とかが狙いじゃないの？」

悠のその言葉に伽黄は首を振る。

「多分、そっちはないな。まぁ、主権争いなんてのは四六時中やってるからな」
伽黄は考えるように口に出す。
多分って事は可能性がそれなりにあるのだ。こう言う話しを聞いたりテレビで見たりする度に、一般人でよかったと悠は思うのだ。
「どうします？」
「取り合えず、近場からだな」
と言って伽黄は歩き出した。
悠と駿来は取り合えず伽黄の後をついて行った。

七十二頁

2

とりあえず近場と言っただけあって、伽黄がきたのは鏡殿だ。と言っても近づく事はせずに門の側で様子を窺っていた。
「静かね」
妖怪が侵入しているとは思えないほど静かな様子に悠が尋ねると、伽黄は露骨に溜息を付いた。
「当たり前だろ。こんな王宮の奥まで入られたら、何のために兵士がいるかわからん」
「まぁ、そんなヘマしたら確実に首切られるよね」
と、駿来は微笑み。
「まぁね」
悠は頷く。
「それで、何を調べるんですか？」
「さぁ」
駿来の疑問に伽黄は首を傾げた。
「さぁって。何も決めてないの？」
言い出した本人が何も決めてないのでは、悠は動きようがなくい迷惑である。何も分からないからと言ってもある程度目星をつけて行動して欲しいものだ。
「しょうがないだろ。分かっているのは、さっきから暴れている妖怪が使役されていることだけだ」
伽黄は溜息を付く。
「使役って？」
「そこら辺にいる妖怪を捕まえて自分の手駒にすることだ」
伽黄は嫌嫌ながら、悠に説明する。

「でも、妖怪を使役するってあまり聞いた事がないんですけど」
駿来は首を傾げる。
「まぁな。この国ではあまりないな。隣国ではよくあるらしいんだが」
「じゃあ、他国の人が？　でも、変ですよね。今は戦時中でもないですし」
「ああ。多分それはないな。だが、この国ではあまり聞かないからって、別に使役できないわけじゃないし」
駿来と伽黄の話に完全に付いていけなくなった悠は、黙って辺りを見回す。
その時、不意に怒号と足音が近くに聞え始める。
「ん？」
悠は音がする方を見て首を傾げた。

七十三頁

「なんだ？」
伽黄は怪訝そうに見る。
「ああ。なんか嫌な感じが」
駿来は苦笑して音がする方を見る。

突然、黒い物体が悠達の頭上を通り過ぎた。

「えええええええ？」
悠は頭を瞬時に押さえる。
「なっ。馬鹿な！」
伽黄は頭上を通り過ぎた黒い物体を見て唖然としたように呟く。
「あれって、もしかして……」
駿来は驚いたように黒い物体を見つめる。
「何？　あれ何？」
悠は黒い物体を指差した。
黒い物体は虎と同じくらいの大きさをしており、本来二つある目は三つあり爛々と金色に輝いている。
黒い物体と見詰め合うほど五秒、伽黄は何かを気付いたように悠を自分の後ろに隠した。
「何？」
悠が混乱気味に声を上げる。
「黙ってろ」
伽黄はそう言うと、黒い物体を追ってやって来た者達を見て顔をしかめる。
「まずいな」
伽黄の言葉を聞いて悠と駿来は顔を見合わせた。一体、何がまずいと言うのか。確かに、目の前に黒い物体、多分妖怪がいるのだか

ら非常に危険な状態なのはわかりきっている事だ。だが、伽黄が言うまずい状況は妖怪とは別な気がする。
「どうするんです？」
駿来は状況に似合わないおっとりとした口調で尋ねた。
「お前は少し下がってろ」
伽黄は苛立ちを隠しながらそう言った。
その時だ。突然後ろから声を掛けられたのは。
「失礼。よろしいでしょうか？」
はっと三人が後ろを振り向くと、黒い長髪を一本に縛った男が膝をついて頭を下げている。

七十四頁

「お前は……誰だ？」
伽黄は驚いたように言った。
知らんのかいっと突っ込みたくなるほどの間に、悠は思わず顔をしかめる。
「私は鏡隊の戒鴻桐（かいこうどう）と申します」
「戒……ああ。なるほど、それじゃあ、君が！」
「はい。そうです」
顔を上げた鴻桐は苦笑する。
「だが、どうして王宮にいる？　今は休暇中だろ」
「ええ。確かに今は父より暇を取るように言われていますが。それよりも、こちらへ。皆にばれると少々厄介かと」
「確かにそうだな。とりあえず、案内しろ」
伽黄はそう言って鴻桐に命令した。
「はい。こちらです」
鴻桐は伽黄に頷いて、さっと立ち上がった。鴻桐は塀に沿って歩きながら、門の反対側まで来ると立ち止まった。正面とは違って裏側にある扉は小さく、人一人ずつしか通る事が出来なさそうな大きさだ。
「これは……」
悠は馴染み深い大きさの門を見て声を上げる。
「裏門ですよ。ここは私たち鏡隊くらいしか使いません」
鴻桐は悠に答えながら門を開けて中へと入った。
悠たちも後をついて門を通る。それから建物の裏手から中に入り、明らかに物置部屋と思われる部屋へと案内された。
「その辺の箱に座ってください。大丈夫です。高価な物はおいてありませんから」
悠は鴻桐にそう言われたものの座るのは気が引けた。高価な物は

おいてないとの事だが、王宮にあって高価じゃないと言われても説得力がない。
「さっさと座れ。落ち着いて話ができないだろ」
いつの間にか座っていた伽黄が悠に向かって言った。
ふっと駿来を見れば、彼ももう箱に座り込んでいた。
「……」
色々とこみ上げてくるものがあったが、悠はぐっと我慢して大人しく箱に座る。
「さっきのは黒翼(こくよく)って言って、山とかに生息している妖怪だ。羽はないが飛ぶ事が出来るから黒と翼って字を使うんだ」
伽黄は先程の悠の疑問に答えてから、鴻桐を見る。
「それで、答えてくれるだろ。どうしてここにいる？」

七十五頁

「はい。父より休みを頂いておりましたが、今日は緊急時のため王宮に入り護衛の任に戻っておりました」
「緊急時？　これのことか？」
伽黄はそう言って悠を指差す。
悠はむっと伽黄を睨み付けた。
「いえ。違います。彼女の事は多分、父……将軍は知らないと思います。彼女の登場は急な事でしたから、まだ多くの高官に伝わっていないと思います。その事ではなく、黒の君はご存知ないかもしれませんが、今多くの国で神の宝珠が破壊されていると言う事態が起きているのです」
「なんだ。それは、俺は聞いてないが」
伽黄は困惑気味に言う。
「……ねぇ。今将軍って言わなかった」
悠はひそひそと駿来に話しかけた。
「聞えたねぇ。彼の事は知らないけど、将軍で戒といったら戒鳴雲（かいめいうん）様の事だと思う」
「それって偉いの？」
「偉いよ。将軍の席は三つあって、白、緑、茶、の三色で色分けされていて、白が一番偉い。で、その白の色を持つのは戒鳴雲様なんだよ」
「ふーん」
悠が頷いた直後、拳骨が頭の上に降ってきた。
「いっ……！」
「うるさい。ざわざわするんじゃない。それで、話の続きだが、それと今回の事と何の関係がある？」
伽黄は直ぐに話をもとに戻した。
「それが、前黒の君である峰海吏より連絡があり、実はその破壊し

て回っている一味が龍斗市に潜んでいるとの情報が入りました。それで、今日は職務に戻る事になりました」
「なるほど……って、待て。師匠よりってどういう事だ？」
「ああ。実は陛下より密命を受けて、一味の事を探っているそうです。なので、黒の君の職が出来ないので、辞めたそうです。それと、黒の君が動いていると思われると警戒されるとの事で、新しい黒の君を立てて、引退と言う形を取ったと」
鴻桐は始終言い難そうにして話していた。
「なるほどねぇ。じゃあ、その件が完了したら、戻ってくるみたいな。感じだな」
伽黄は笑顔で言いつつも、顔が怒りで引きつっていた。
「多分。そうではないかと」
鴻桐の言葉を聞いて、伽黄はがんっと箱を殴った。
「あの、バ……」

七十六頁

「あの、バ……」
怒りのあまり震えている伽黄を見て、悠は内心でこの人苦労してるなぁっと思っていた。

3

「で。神の宝珠を破壊しまくってる連中が、今暴れている黒翼と関係があるって？」
怒りを押さえ込んで伽黄が尋ねた。
「ええ。その可能性もあるかと思われます。行かれますか？」
鴻桐がそう尋ねると、直ぐに伽黄が頷いた。
「ああ。行く」
伽黄の言葉に悠と駿来は顔を見合わせた。
「お前たち二人は……」
伽黄が続きを言おうとした瞬間、周囲の音が騒がしくなってきた。先程からずっと大声やら何かがぶつかる音が聞こえていたが、その音がずっと近くに聞こえる。
「全く、何をやってるんだ」
伽黄が苛立ちげに言う。
「少し様子を見てきます」
鴻桐が頭を下げて部屋から出て行った。
「あの。戒鴻桐様は何かやらかしたんですか？」
駿来は伽黄に尋ねた。
「ああ。まぁ、やらかしてはいないんだろうが……」
伽黄は困ったように頭を掻く。
「そうだ。一応聞いておくか？　お前にも関係ある話だ」
と言って、伽黄は悠を見つける。

「私？　なんで？」
鴻桐とはつい先程会ったばっかりで、関係も何も自己紹介さえしていない赤の他人だ。一体その鴻桐と何が関係していると言うのか。
「きっとお前は怒るだろうが。お前の妹である巫女様と、さっきの鴻桐が恋仲に発展しそうだったらしい。だが、次男とはいえ、将軍を父に持つ鴻桐は将来出世するであろうと言われている。その所為か、巫女の使えている年頃の少女達が牽制しているみたいだ」
「はぁ？」
「もともと、巫女は気が弱いとかなんとかで、どうもその少女達に負け気味だったらしい。でだ、それがきっかけに悪い方に考え始めて、結界が揺れだし、どこからか姉の話を聞いて、神様に頼んで呼んじゃったらしい」
伽黄は悠から視線をそらして言った。

七十七頁

「え。いや。ちょっと、よく分からないんですけど。もしかして、私って妹の恋に巻き込まれて来ちゃったって事？」
「多分な」
「それで、この国では双子は駄目で、今王宮に監禁まがいの扱いを受けて、もうしかしたら殺されちゃうかもって？」
悠はひくひくと眉を引きつらせる。
「ああ。可能性はあるな。昔はその決定が出た」
「んな。しょーもない理由でこっち来ちゃったんかい！」
悠は伽黄の胸倉を怒鳴りつけた。
「知るか。俺は巫女とはあんまり関わりないんだよ。まぁ、願った所で人に神隠しは起こせないから、怒るんなら連れてきた神様に怒るんだな」
「ほう。ならその神様の所に案内してもろおうか？」
悠は周囲に殺気を振りまきながら、満面の笑顔で言った。
「いや。俺、どの神様か知らないし」
伽黄は悠から視線をそらして言う。
「なるほどねぇ」
悠はぱっと伽黄の胸倉から手を離して、静かに扉に向かって歩き出した。
「ちょっと待て。殴り込みはするな。いちよう、巫女はお偉いさんだから」
伽黄は慌てて悠の肩を掴む。
「ええ。うっさい。相手がどんなにお偉いさんだろうが、イラつくもんはイラつくの！」
「まぁまぁ、二人とも、今はそこで争っている場合じゃないから」
駿来の言葉にきっと悠は睨み付ける。
「ええと。なんだっけ、神の宝珠の破壊している一味が、王宮に侵

入しているかもしれないんだよね。だったら、とりあえず、神の宝珠の鏡が無事なのか確かめに行った方がいいんじゃないかな？」
駿来は悠の視線にびくつきつつも、至極冷静な意見を言った。
「あれ。もしかして、そこに巫女様っているんじゃいの？」
思わず背筋が凍るような声を聞いて、駿来はあははっと愛想笑いを浮かべた。
「とにかくだ。巫女に殴りこむのも、黒翼の件が片付いてからだ」
「えー」
思わず文句を上げる悠に伽黄は溜息を落とす。
「それに、お前の存在を周囲にばらす訳にいかないんだよ。権力者達に、意識変えさせるにも色々と準備がいるんだよ。後でちゃんと面会させてやるから」

七十八頁

「じゃあ、約束ね。破ったら、伽黄の家の高級品全部打っ壊すから」
悠は渋々、頷く。
「ああ。それでいいよ」
伽黄は溜息を落としたのだった。
少し様子を見てきますと言って部屋を出て行った鴻桐がいつまで待っても戻らないので、悠達は置手紙を残して置き、神の宝珠の鏡がある部屋を目指して歩いていた。神の宝珠の鏡が置いてある部屋を鏡の間と呼ばれていた。そして、神の宝珠の鏡は封じの鏡と言う名で呼ばれている。
「なんか。そのまんま」
と言う悠の呟きは二人に黙殺された。
外の喧騒とは違い、不気味と思う程の静けさに悠は身震いする。まるで、誰でもいないのではないかと錯覚してしまうほどだ。だが、外の喧騒が辛うじて聞えてくる事から、それほど孤独感はない。
「ねぇ。なんでこの中、こんなに静かなの？」
前にも思った事だが、人が住んでいるにしては静かすぎる。
「さぁ。俺はここには来ないからな。王宮の中とは言え、鏡殿で暮らしている者は少ないからな。それにここは一様、神聖な場だからあまり騒いだりしないんだろ」
伽黄はそう答えて、直ぐに立ち止まった。
「ここだ」
と、扉を指差す。
「来ないくせによく知ってるよね」
悠はじっとっと伽黄を見る。
「それくらい一度来れば十分だ」
しれっと言って伽黄は扉を開けた。
開いた扉の隙間から中を覗き見ると、目の前に祭壇があり、その

上に鏡が置いてある。鏡と言っても悠が思っていた物とは違い歴史の教科書に出てくる青銅製のものだ。横から見ているために、詳しい柄はわからなかった。
「って。ここで入り口じゃないの？」
「ああ。ここは鏡殿に住む者しか使わない。ちゃんとして門あっちだ。それは外に繋がっている」
と、伽黄の指す方を見ると、確かに立派な扉、と言うより門があった。
「ああ」
「つっても、あの門が開くのは一年に一度だけだけどな」
悠が伽黄になんでと尋ねる前に、駿来が悠と伽黄を突っついた。

七十九頁

「部屋の中に誰がいる」
駿来を聞いて、悠はきょろきょろと部屋の中を見渡した。
「誰もいないけど？」
何度も部屋を見渡したが、人っ子一人いない。
「……なるほど」
と伽黄はにやりと笑う。
「えーと？」
伽黄は何か発見したらしいが、悠には何も変わっているようには見えない。
「多分なんだけど、あの人は何かの術を使って姿を周囲に見せないようにしてるんだよ」
「でも、どうしてわかったの？」
悠は首を傾げる。
「それは……」
「それはだな。よく見てみると、そいつがいる所と周囲の壁に歪みがあるんだ」
言いよどむ駿来に、伽黄が直ぐに後を続けて説明した。
「歪み？　そんなのないけど？」
伽黄が指す所をじっと見るが、何も変なところはない。
「そうだな。なんて言ったらいいか……。まぁ、わかんないなら、それでもいいか。とにかく止めるぞ」
「止めるってどうやって？　だってどこにいるか分かんないんだよ」
侵入者の居場所を知っている駿来と同じ扱いをされても困る。
「お前に言ってない。そうだな。お前は封じの鏡の安全を確保しろ」
伽黄はたった今思い出して用にとってつけた。
「はぁ」
「俺たちがもし死んだら、お前が死守しろ」

「嫌だ」
悠は露骨に嫌そうなする。
「んーと、もしかして俺も戦力に入ってるの？」
と、駿来は困ったように笑う。
「お前ら、今は緊急時なんだからおとなしく手伝え」
伽黄は怒った様に言った。
「えー」
「えーと……」
悠と駿来が揃って文句の声を上げた。
「お前ら……」

八十頁

伽黄は怒鳴りつけようとする自分を押さえ込んで、続けて口を開いた。
「やれ」
声を抑えて、低く言う様は逆に恐ろしい。渋々、悠が頷いた所で、反対側の扉が突然開いた。悠たちが反射的に、反対側の扉を見ると、そこには鏡の巫女である結花と王宮の部屋で別れた鷲鳳が立っていた。

4

「なっ！」
想定外とはまさにこの事で、伽黄は驚いた様に結花と鷲鳳を見つめていた。
「ああ。彼女が巫女様か。確かに顔は似てるけど、雰囲気は全然違うねぇ」
と、駿来はにこっと笑った。
「まぁな」
「うん。まぁね」
伽黄と悠はそれぞれ頷いた。
「って。そんなこと言ってる場合か！」
と、悠と伽黄がほぼ同時に突っ込んだ。
危うく駿来のおっとりペースに呑まれてしまった自分に悠は反省しつつ、伽黄を見上げた。
「どうすんの？」
「……とりあえず、巫女の安全と封じの鏡の無事が大事だ」
伽黄は苦々しく結花と鷲鳳を睨み付ける。
その視線に気が付いたのか鷲鳳は苦笑する。だが、結花連れてき

た事に謝っている場合でもなく、鷲鳳は直ぐに真面目な表情を浮かべる。
「だから、それって私も含まれてんの？」
「行くぞ」
悠の言葉を無視して、伽黄は走り出した。
駿来は仕方なく、伽黄の後ろについて走りだす。
「ええぇー」
悠は文句を上げるも、封じの鏡に向かって走り出した。悠は封じの鏡の前で立ち止まり、顔をしかめた。
（って。だから、何をしろって？）
安全を確保しろと言われても、悠に封じの鏡を守りきる自信はない。悠に出来る事は封じの鏡を持ってこの場から離れる事だけだ。だが、封じの鏡を持ってどこに逃げろと言うのか。どこが安全なんて悠に分かるはずもなかった。

八十一頁

「お姉さま！」
悠より遅れて封じの鏡の前に辿り着いた結花は、肩で息をいた。
その後ろについている鷲鳳の息は全く乱れていない。
「って。なんで来ちゃったのよ」
と、伽黄も聞きたかったであろう事を悠が言った。
「なんでと申されても。鏡の間に人の気配を感じたので参ったのです」
結花は可愛らしく首を傾げる。
「気配って……」
「あー。悠、避けて！」
その声と共に駿来が悠にぶつかってきた。
肩を軽くかすめたで直撃しなかった悠はほっと息を吐く。
「それにしてもさっき向かってたばかりじゃん」
「あーそれは……」
立ち上がって体を点検していた駿来は悠の言葉に苦笑する。
「ふーむ。まいずな。非常にまずい状況だ」
と、いつの間に戻ってきた伽黄が前方を睨み付ける。
「いや。だから……」
さっき向かっていたばっかりでしょうが、とは言わずに皆が見ている前方を見ると、今度は先程と違って全身黒に包まれた人物が見えた。
（忍？）
よく漫画やテレビに出てくる昔の忍の様な着物に顔を黒い布で覆っている事から顔は見えないが、体型を見れば女性ではないだろう。
「って。どうします。こっちのわざは効かないんでしょう？」
駿来は伽黄の隣に立って尋ねた。
「もともと式術ってのは人には使わないんだよ。使っても結界だけ

だ。それに、あいつかなりの腕前だ。若い五色と同じくらい腕は持ってるはずだ」
「えーと。じゃあ伽黄さまと同じくらい力を持って？」
「いや。俺以上だな。それに、俺は役職を押し付けられただけだ」
当時の事を思い出したのか、伽黄は顔をしかめる。
「それに厄介な事が。俺は武術とかはまるでできない。そもそも括りとしては文官だからな。剣もそれなりに使えるであろう相手には対応できん」
伽黄はきっぱりと言う。
「んな堂々と言われても」
との悠の言葉を伽黄は無視して、鷲鳳に話しかけた。

八十二頁

「それで、お前に手伝って欲しいんだが」
「はい。勿論」
鷲鳳はそれだけ言うと、自らの太刀を鞘から取り出した。
「それとこれを」
伽黄はそう言って、一枚の札を悠に手渡した。
「えーと」
悠は札に視線を落すも達筆すぎて読めなかった。そもそも読めたとしてもこの国の言葉は、悠には解読不可だ。
「攻撃が来た時はこれを使って攻撃を防ぐんだ」
「は？」
悠はぽかんっと口を開けて伽黄を見る。
「それくらい出来るだろ」
伽黄それだけ言うと鷲鳳の後を追って直ぐに行ってしまった。
「ちょ……」
いくらなんでも渡す相手が間違っている。例え、鏡の巫女と言うすごい力を持つ結花と姉妹だともわかって、自分も同じくらい力を持っていると言われたとしても、生まれてこの方そんな力が存在しない世界で暮らしていたのだ。渡された所で、使えるわけがない。札を渡すのなら、駿来か結花に渡すべきなのだ。
「うう……」
と、唸って悠は差し出された札を見る。
「大丈夫だよ。変な呪文とか言わなくても、その札投げるだけで平気だから」
駿来は札を覗き込んで言った。
「なんで？」
普通は何か呪文だのなんだの言って投げるものではないのだろうか。

「もうその札に術式が書かれてあるからね。それにこれは伽黄さまが作ったものだから、悠が力を込めなくても、既に込められているから平気」
「じゃあ、投げるだけで問題ないの」
「うん」
駿来は頷いた。
（じゃあ、別に私はなくてもいいんじゃない）
と、悠は首を傾げた。
「駿来殿は式術に詳しいのですね」
と、それまで黙っていた結花が駿来に尋ねた。
「まぁ、勉強しましたから」
駿来は少し照れたように笑う。

八十三頁

「ところで、式術って何？」
　これまで式術師が何であるか聞いていたが、式術そのものについては聞いた事がない気がつき、悠は尋ねた。
「んーと、言葉にはそれぞれが持っている力があってね。それを言霊と言うんだけど、その言葉の組み合わせで術を発動させるんだ」
「は？」
　悠はぽかんと口を開ける。何やら聞いた事があるような言葉も出てきたが、何かを言っているのかさっぱりわからない。
「んー。俺は教えるのが上手くないかなぁ。そうだな。例えば、攻撃から身を守る為に、相手と自分の前に見えない障壁を張るのを、護ると、壁って字を言う」
「言うだけ？」
「そう。でも、二文字だけだと威力が少ないから直ぐに消えてしまうんだ。だから、札に六文字から十二文字を予め書いておくんだ。で、後はそれを投げるだけ。言うよりもそっちの方が早いから、式術師は大抵札を持ち歩いているんだよ」
「ふーん。組み合わせる文字は多い方が威力が強いの？」
「いいえ。違います。強い力を持つものなら、少ない字数でも十分な威力を発揮します。文字を多く書くのは、自分の力が弱い者だけです。力の消費率を下げる為に多く文字を書きます。文字を多く書けば、言葉の力が増幅されるので、少しの力で術が発動できますから」
　と、結花が悠の疑問に答えた。
「んー」
　と、首を傾げた悠に、駿来は苦笑する。
「力の節約だよ。力が弱い人は、術をぽんぽんと撃ったら直ぐにばてちゃうから。結構、消費が激しいんだ。だから、別のところから

補ってるわけ」
「ふうん。じゃあ、これは？」
悠はひらひらと札を揺らす。
「ああ。それはね。力の強い人がする反則ぽい事で、前もって何枚も力を込めた札を作っておくんだ。そっちの方がずっと力の節約になるからし、小技に力を消費しなくていい分、大技がばんばん使えるってこと」
「なるほど。なんだが、疲れるのね。式術って」
悠は納得したように頷いた。
「それは武術も一緒だよ。どんな事だって、頑張れば疲れるもん」
「まぁね」
駿来の言葉に悠は頷いた。確かに、一日中頑張って働き続けたら疲れるものだ。悠にも経験がある学校とバイトを終えて帰ってきた日は、風呂に入らずに寝たくもなるものだ。と内心で納得していた悠は、金属音を聞いてはっと鷲鳳の方を見た。丁度、鷲鳳とあの侵入者が剣を交えているのが、悠の視界に飛び込んでくる。

5

鷲鳳は男と剣を交えながら、ある違和感を覚えていた。いや。それを言うなら最初からだ。いくらなんでも王宮に一度も入った事がない者が、こんな王宮の奥まで入って来られるわけがない。それに、どの建物が鏡殿であるかなど教えてもらわなければ分かるはずがないのだ。王宮に内通者がいるか。だが、どうもこの男の剣の筋に覚えがある。

三度、剣が交わった瞬間、男はにっと笑う。

「どうした。鷲鳳。もうばてたのか？」

その言葉を聞いた一瞬、鷲鳳は動きを止めた。男はその一瞬の隙を付いて、鷲鳳を蹴り飛ばした。

鷲鳳はそのまま、伽黄が作っていた壁に背中を強打する。

「おい。いきなりどうした？」

伽黄は鷲鳳の方を見ずに問い掛ける。

「いえ。ただ」

起き上がった鷲鳳は、苦々しい表情を浮かべる。

「ただ？」

「俺はもうこの国にいないと思っていましたよ」

鷲鳳はそう言って溜息をつく。

「何のことだ？」

「三年前、封じの鏡を盗もうとした失敗し、王宮を出奔した男です」

鷲鳳の言葉に男とは笑う。

「別に盗もうとしたわけじゃない。壊そうと思っただけだ。だが、あれは普通の武器じゃあ壊れないらしいな」

「何故、戻ってきた稿銘（こうめい）！」

鷲鳳の怒鳴り声に男は笑って答える。
「なに理由は簡単だ。封じの鏡を壊す術を知っただけだ」
「馬鹿な。そんな方法などあるわけがない」
鷲鳳は驚いたように言う。
「さぁな。俺はお前達の敵だぜ。懇切丁寧に教えてやるほどお優しくはない」
との言葉の直後、男は口笛を吹く。

八十五頁

「何？」
悠が首を傾げた直後、扉を破る轟音が響き渡ると同時に薄暗かった部屋に光が差し込んでくる。
「ああ！」
悠はそれを指差しながら叫び声を上げる。
それは先程見たばかりの黒翼だった。
「なんで、あれがここにいるのよ」
「どうやら逃しちゃったみたいだねぇ」
激しく動揺する悠に駿来はのほほんと答えた。
「のんきに言ってないで、どーすんのよあれ！」
悠は駿来の服を引っ張る。
「どうするって言われても。俺じゃあ何も出来なし」
「だって、式術の心得あるんでしょ。それで！」
悠ははっと、駿来が式術師になるための試験受けた事があると言っていた事を思い出して、提案する。
「無理だよ。俺、実戦経験ないし」
と、駿来は首を振った。
その間、黒翼は鷲鳳と男の頭の上を飛び越えてこちらに迫ってきていた。鷲鳳は男の相手で精一杯で黒翼を押さえ込むのは無理だ。
伽黄は何かをぶつぶつと呟いているだけで、黒翼を押さえ込んでいるのかどうか悠達にはわからなかった。
「ああ。そうだ。結界だよ。あんなに元気よく動けるのは、きっと結界が弱まっているせいで結界を張りなおせば、動きを止められると思う」
駿来は思い出したように手を叩く。
「動きを止めてどうするんの？」
「動きが鈍れば、攻撃も当てやすくなるから。巫女様。お願いでき

ますか？」
駿来は結花と向き合って頭を下げる。
「私は……」
結花が話し出した瞬間、黒翼の叫び声が聞えた。
悠達が黒翼の方を向くと、黒翼に弓矢が刺さっているのが見える。
直ぐ側には弓を構える鴻桐がいた。
「さぁ。今のうちに」
駿来は再び促すが、結花は動かなかった。
「私には出来ません」
結花は下を向きながらそう言った。

八十六頁

「はぁ？」
悠は困惑したような声を出す。
「お姉さまがおやりになればいいんですわ。私の力が弱いからこのような事になるのです」
「はぁ？　私はただの一般人だって」
出来るかっと言う言葉を呑み込んで悠は手をぶんぶん振る。
「そんな事はありませんわ。とても輝くばかりの力を持っているのがわかりますもの。きっと強い力をお持ちのはずです」
結花は下を向いたまま答える。
「それに、私は……」
ぐずぐずと言っている結花を見て悠はイラっとした。
悠は黙って結花の前まで来ると、ばしっと両方の頬を掴んで顔を上げる。
「ぐちぐちと言ってないで、さっさとやりさない」
悠は結花に怒鳴りつける。
結花は驚いたようにぱちぱちと目を瞬く。
「この国の巫女は私じゃなくてあんたでしょうが。あんながやらないでどうするの？　例え、力が弱かろうが、自信がなかろうが。今、あんながすべき事は結界張りなおして、あいつを捕縛すんのを手伝うのがあんたの仕事でしょうが」
「それは」
「巫女様って言われて、高価な服を服を着て、大勢の人に守られているのは、あんなの仕事が重いからよ。責任が重い仕事であれば、それだけの対価が高くなる。あんたは与えられている対価分の仕事をしなきゃ駄目なの」
「それはわかってますわ」
「わかってない。わかってないから、今ぐちぐちと言ってんの。本

当に分かってたら、直ぐに行動してるでしょうが。力が弱いって言って、この仕事から逃げ出そうとしているみたいだけど、巫女に選ばれたのはあんたで、私じゃない。私じゃ、あんたの代わりは出来ない。だって
巫女はあんたでしょ」
「……」
「それに、与えられてた仕事もまっとうできないで、何かあったら逃げたしていくような人間が、何かを得られる訳がないでしょうが！」
「ちょっと、悠」
急に怒り出した悠におろおろと駿来が、やっと悠を止めようと声を上げるが、悠に睨み付けられて黙り込んだ。
「何をうじうじと悩んでるのか知らないけど、悩んでるだけじゃ何も得られない。闘わずして得られるものなんてなし。あんたは、このまま何もしないで指をくわえて見ているだけでいいの？」
悠の言葉に結花はぽかんとして悠を見ているだけだ。

八十七頁

（わかってんの？）
呆然としている結花を見て悠は顔をしかめた。
（もしかして一度も怒られた事ないとか？）
と思って悠ははっと気付いた。がんがん怒鳴りつけていたが、相手は超お偉いさんだ。こんな事をしてだだではすまないのではないだろうか。だが、もう言ってしまった以上、どうにもならない。それにどうしたって、悠の身が危ないのは変わらない事だ。それに少しすっきりとした気もするからいいとしよう。
「とにかく。さっさとやりなさい」
と、悠は結花を後押しする。
結花はおっかなびっくりに頷いて封じの鏡の前に座り込んだ。そして、結花は鏡の前で目を閉じで祈るように手を合わせる。
これで、何か雰囲気が変わったとか分かればいいのだが、悠には何も感じる事がなく、失敗なんじゃと思った頃、駿来が声を上げる。
「悠。見て」
悠は駿来が指差す黒翼の方を見ると、黒翼の動きが緩慢になっているのがわかった。弓を構える鴻桐も黒翼の事が狙いやすそうだ。
「なるほど」
男は結花を見て溜息混じりに言う。
「結界弱まっている今なら、結構入りやすいかと思ったけど。駄目だな。まぁ、実力がないわけじゃないしな」
男は残念だと呟いてから、口笛を吹く。
黒翼は直ぐに男の前に移動する。黒翼は動きこそ遅いものの、傷が痛む素振りは見せなかった。
「今回はこれまでかなぁ。まぁ、もっとも今回は偵察って感じだからいいんだけど」
男はそう言って、黒翼に跨った。

「待って」
鷲鳳は男を追いかけようとするが、伽黄に止められた。
「やめとけ。俺もお前も準備不足だ。それに……」
伽黄は言いかけて、直ぐに口を閉じた。
「まぁ。そう言うことで」
男はそれだけ言うと、黒翼と共に鏡殿から去って行った。
「何故です？」
それを見た鷲鳳が伽黄に掴みかかるように問い掛けた。

八十八頁

「追った所で直ぐに撒かれる。それに、あいつが使っている道は機密事項だ。俺が話す事はできない。まぁ、俺も秘密の抜け道があるのは知っているが場所まではしならいな」
伽黄は溜息をつく。
「まぁ、外部に漏れた以上、塞ぐしかないだろうな」
と、伽黄が言うのを鷲鳳は黙って聞いていた。
「秘密の抜け道？」
伽黄たちの話を聞いて悠は、その言葉を聞いて首を傾げる。
「あれだよ。緊急時に王族が逃げ出すために作られた抜け道じゃないのかな」
駿来の言葉に悠は黙って頷いた。どうも変な感じだが、場所を考えれば抜け道などがあってもおかしくはないのだろう。
「気になるなら教えてもいいよ」
と、後ろから声を掛けられて悠は後ろを振り返った。
「あ！　えっ。はぁー？」
まさか、こんな騒動の真っ只中だった場所にいる訳がないと思っていた悠は、その人を見て驚いた声を上げた。
そう。龍記国皇帝陛下その人である。しかも、服装は街中で見かけた時と同じような物を着ていた。
伽黄が何かを言う前に、遼賢が先に口を開いた。
「とにかく、君がここにいたら大変だから、こっちおいで」
遼賢は手をひらひらと振りながら、悠を見つめる。
「私？」
悠は自分を指差して、困惑したように言った。
「そうそう。大丈夫。困った事にはしないから。ほら」
悠は困ったように周りを見るが、伽黄は行けと促し、他は黙ったままだった。仕方なく悠は遼賢について行ったのだった。

終章　そして、振り出しに戻る

あの騒動の三日後、ようやく伽黄が屋敷に戻ってきた。
王宮に侵入した賊が、見つかったと言う報は聞かないから、多分見つかっていないのだろうと駿来は考えていた。それに、あの件については口止めされたし、駿来にこれ以上、関われる事ではなかったから、特に気にしない事にした。きっと、動くべきところが、動いているだろう。
伽黄の帰宅を鈴明から聴いた駿来は直ぐに伽黄の元に向かった。帰ってきた伽黄は相変わらずの不機嫌そうに机に向かっている。駿来が挨拶をするが、ただ黙って頷くだけだった。
「それで、悠は？」
との駿来の質問に伽黄は面倒そうな表情を浮かべる。
「とりあえず、この家で預かる事になった。国外追放だのはない。元々、本人もここに留まっているつもりもないみたいだしな」
「そうですか」
駿来はほっと息をつく。
「で？」
と、伽黄は駿来に尋ねる。
「え？」
駿来は驚いたように伽黄を見る。
「話はそれだけか？」
伽黄の言葉に駿来は首を横に振る。
「いえ。あります。伽黄様にお願いがあります」
駿来は真剣な表情で伽黄を見つめた。
伽黄は黙って聞いていた。
「俺、いえ。私を伽黄様の弟子にしてください。もう諦めろと言われるかもしれませんが、どうしても俺は諦められないんです。帰れる可能性が低い悠も帰る事を諦めたりはしなかった。だから、俺も

諦める事できない」
　ずっと皆から帰る可能性が低いと言われてきた悠だが、一度として帰るのを諦めたりはしなかった。そんな悠を見て、自分が早々と諦めて他人に嫉妬しているだけの自分が馬鹿らしい。力が弱いなどと所詮は諦めるための言い訳に過ぎない。確かに、このまま目指し続けても家族に迷惑が掛かるだけだ。だから。
「俺の家は裕福ではありませんし、このまま粘るのも馬鹿らしいとも思います。だから、これが最後です。次に落ちたら、俺はきっぱり諦めます。俺に式術を教えてください。お願いします」
　と、駿来は頭を下げた。

九十頁

「ああ。いいよ」
とのあっさりとした答えに駿来は慌てて顔を上げる。
「いいんですか？」
「ああ。元々、そう師匠に頼まれたたからな。あの手紙には悠の事と、お前の事が書かれていた。だから、お前が頼んできたら受けると決まってたんだよ」
伽黄はそう言って溜息をついた。
「面倒だが、俺もそろそろ教わる立場から教える立場に回らないとならない。だから、お前の存在はある意味では助かるな。悠にお前か。まぁ、厄介事ばかり回ってくるのが、黒の君の一派だからしかたない。お前もそれを覚悟しておくんだな。嫌なら、ちゃんとした人を紹介してやるがどうする？」
と、伽黄は可笑しそうに尋ねる。
「いえ。俺は黒の君一派でいいです。それに、悠の事も気になりますから」
駿来はくすりと笑った。
「そうか」
と、伽黄が頷いた時、どたどたとして足音が部屋に迫って来た。
勢いよく扉が開いて、悠がきっと伽黄を睨んだ。
「って。結局、ここで居候じゃない。いつになったら帰れるのよ」
「知らん。俺に聞くな」
伽黄はふいっと顔をそむける。
「知らんじゃないでしょ。全く、どいつもこいつも。こうなったら」
悠はぐっと手を握り締める。
「悠。お帰り」
駿来はひょいっと悠の前に顔を出した。
「あっ。ただいま……って、そうじゃないでしょう。そうじゃ」

駿来に雰囲気にそのまれそうになった悠は首を振る。
「ああ。そうだ。俺、伽黄様に弟子入りしたから、しばらく一緒に住めるよ」
「へぇ。そうなんだ。よろしく……って」
再び脱線しそうになった話を元に戻ろうと、伽黄を見る。
「で、ちゃんと見つけてくれるんでしょうね」
「まぁ、俺はやらないが、巫女様はやってくれるんだろう。だったら、見つかるはずだ」
伽黄は素っ気なく言う。
「ぐっ。それは……」
「大丈夫だよ。巫女様が見つけてくれるって言うんならすぐ見つかるって」
駿来はにっこりと笑って答える。
「……まぁ、ねぇ」
なんだか納得できないが、悠はとりあえず頷いた。この国に来た時よりは色んな事がわかったが、日本に帰る手立ては見つかってはいない。双子の妹である結花が神様を見つけてくれると言っていたが、本当に見つかるのか。それに、全てを他人任せにするのもどうも落ち着かない。だが、神の見つけ方など悠は知らないし、神が存在していると分かってはいるものの、それを実感できてない現状もある。
「うー」
「まぁまぁ。俺も何か手伝える事があったら、手伝うからさ」
駿来は一人唸っている悠の肩をぽんぽんっと叩きながら言った。
「お前は人の事よりも自分の事を考えろよ」
伽黄は呆れたように溜息をつく。
かくして、三人の同居暮らしが始まったのだった。

（終わり）

九十頁（後書き）

書き直しました。と言っても内容は変わってないのですが。ずっと変更したくうずうずしていたので、思い切って変更してみました。『龍記国物語ー鏡の巫女ー』楽しいで頂けましたでしょうか。この話をここまで読んでくれた方に感謝の気持ちでいっぱいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5339f/

龍記国物語―鏡の巫女―

2010年12月26日21時26分発行